

輝かしいこの世界を

人参天国

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日突然ポケモン世界にやつて來てしまつた主人公。口クな知識は無いものの、この世界への興味は抑えきれない。せつかくなんだ、小さな相棒と一緒に旅に出ようじゃないか！

物語はホウエン地方（RSE）から。ストーリーはゲーム、ノリはアニメ、難易度はポケスペを目指す、楽しい楽しい旅の始まりです☆

目 次

ポケットモンスターのせかいへようこそ！

ミシロタウン①

ミシロタウン②

101番道路

コトキタウン

102番道路

48 39 29 15 8 1

ポケツトモンスターのせかいへようこそ！

気がつくと知らない場所に立っていた時、人はどんな反応をするだろうか。コンビニへ行こうと歩いていたら、突如木々に囲まれた道の真ん中に突つ立っていた時、どんな反応ができるだろうか。

自分の場合は……

「…………え」

とりあえず思考停止であつた。
ちなみに事故にあつた覚えはないし、眠つたり気を失つたりした記憶もない。

「…………んん？」

周りを見る。アスファルトではなく土がむき出しになつてている道と、それを囲む木、木、木。はい、終わり。

「どこだここ…………えつ、どこだここ!?」

待て待て、意味わからん！　え？　え？　何これ、どーなつてんの！？　どこだよここお！　俺、今まで町にいたよね！　森じやん！　ここの森じやん！？　テレポートでもしたの俺！　ひやつはあ、能力に目覚めたぜえ！

といい感じで混乱していると、遠くから鳥が飛び立つ音と、何かの鳴き声が聞こえてきた。

——スバー！　スバー！

「…………『すばー』？」

幻聴だろうか。この世にあんな奇怪な鳴き声の動物がいるとは思えないんだが。なんだよ、すばーって。思いつきりすばーって言つてんぞ。もうちよつと鳴き声らしい声だせよ。

気が抜ける様な声を聞いたおかげで、少し気持ちが落ち着いてきた。そこで今度は自分の持ち物を確認してみようとして、更におかしなことに気がつく。服装がさっきまで着ていた服とはまったく違うものとなつていたのだ。赤と黒という、若干派手な色の半袖長ズボン。赤い指ぬきグローブに緑と黒のリストバンド。靴だけはなぜか

服に合っていないというか、少しミスマッチなデザインだが、動きやすく、全体的には運動しやすい格好になつていいようだ。

そして、自分の財布やらスマホやらはどこにもない。持ち物を全部なくしている。

「やべーよこれ…………あれだろ、異世界転移とかそんなんだろ。道具もないし、チート能力ないとマジで死ぬぞ…………！」

思いつきで虚空に向かつて全力パンチ。発生した衝撃波で木が吹っ飛んだ！…………となつてほしかつたが、そんなことはなかつた。内なる力を解放させるように全身で力んでみたが、何も起こらなかつたので力を抜くと、わずかな虚無感を感じたように思えたのは、自分が能力者だからか。

「これが物語ならチユートリアルとかあつてくれ…………！　あまりに不親切すぎるぞこれは！」

そんなことをぼやいていた時であつた。

「たつ、助けてくれーっ！！」

「うえつ…………まさか本当にチユートリアル的なものが!?」

近くで助けを呼ぶ声が聞こえた。

非常にタイミングが良かつたし、ここは迷わず助けに向かいたいところなんだけど、手に負えないようなモンスターとかいたらどうしよう……ええい、男は度胸だ！　行つてやる！

木々の間を通つて声がした方向に走つていくと、すぐに開けた場所に出た。周囲を見てみると、声の主が一発でわかる。白衣を着た小太りの男性が木の上にしがみついていて、下にいる奇妙な鳴き声の、タヌキを連想させるような謎の動物に吠えたてられているのだ。

「ザグー！　ザグー！」

「ひえええ！　尻尾を踏んじやつたことは謝るから、許してくれよお！」

なんだアレ……タヌキ？　にしては鳴き声がおかしすぎるだろ……なんだよ『ザグー』って。タヌキならもつとこう……タヌキの鳴き声つてどんなんだつけ。

「ああっ、そこのきみ！　助けておくれーっ！！」

「げつ、気づかれた。他人のふりしようかな……」

「ええつ、わたしを見捨てないでおくれーつ!?」

とは言われても、いつたいどうすりやいいのだろうか。あのタヌキを追い払いたいところだが、なんだかこのまま向かつて行つても手痛い反撃をくらいそうだ。ちっこくて、撫でまわしたいぐらい可愛いタヌキなんだが、なぜかそんな気がする。

「きみ！ そこにあるカバンにモンスターボールが入つている！ その中のポケモンで追い払ってくれえ！」

「へえ、モンスターボールが…………モンスターボールウ!? ポケモンンンン!？」

その単語はどつちも聞き覚えがある。言うまでもなく『ポケットモンスター』のゲームやアニメでだ。あいにく『銀』しかやつたことがないため、あのタヌキは知らないが、まさかあれもポケモンなのだろうか。ここは、ポケットモンスターの世界なのか!?

慌てて近くに落ちていたカバンの中身を探つてみると、やはり見ことがある赤白の球を三つ見つけた。間違いなくこれらはモンスターボールだ。きつとこの中にはポケモンが入つていてるんだろう。ぜひとも出してみしたい！ 出してみたいところだが……問題が一つ。

「ど、どうやつたら出せるんだ……」

「きみ、モンスターボール使つたことないの!?」

ゲームの中では数え切れないのでほど使つたんですけどね……

「放り投げるだけだよ！ 投げればポケモンが出てくる！ 早く、そろそろしがみつくのも限界なんだあー！」
「わ、わかりました！」

適当なモンスターボールを掴んで、投げた。すると、モンスターボールは空中で白い光を吐き出し、その光は一ヵ所に集まつて形となつて……一匹のポケモンになつた。

「チャモー！」

そのポケモンも見たことがないポケモンだつた。オレンジ色で鳥の様な、どこかヒヨコを彷彿させるポケモンだ。両脇についた小さな

羽の様なものをパタパタと動かしている姿は、実に。実に！

「か、かわいい！」

「アチャヤ？」

もう、今まで生で見た生き物のなかではダントツのかわいさだ！これが生ポケモンのかわいさか！なんか『チャモー』とか言つてるし！なんか首かしげてるし！やばい、あんな中年のオッサンなんかほつといて、今すぐ抱き上げてモフモフしたい！

「そのアチャヤモは『鳴き声』と『ひつかく』と『火の粉』が使えるよ！」

「チツ……」

「あれ、今舌打ちしなかつた!?」

仕方ない、実際あのオッサンをそのままにしておけないし、ここは早くやることをやつて、アチャヤモとやらと触れ合うことにしよう。それには、まず初めての本物のポケモンバトルに勝たなくてはいけない。

さつきまでオッサンに吠えていたタヌキのポケモンは、アチャヤモが出てきたことに気づき、こちらを向いて戦闘態勢になつている。

「ザグウ……！」

「よ、よーし！ 初バトルだ！ 賴むぞアチャヤモ！」

「チャモー！」

「『ひつかく』だ！」

「チャモー！」

アチャヤモがタヌキに向かつて駆け出した。そしてその勢いのまま、足の爪でひつかこうと飛び掛かる！

「ザグ！ ザグー！」

「うえつ、よけられた！」

「チャモツ……」

しかしタヌキは慌てて横へ跳ねる。アチャヤモの爪は空を切ることになった。

「ザグツ、ザグウ……」

「はうつ！」

「アチャツ！」

回避したタヌキが可愛らしく鳴く。その姿に思わず胸がときめいてしまった。

「あ、あんなカワイイ奴を攻撃しないといけないのか……！」

「あれは『鳴き声』って技だよ！　ああやつてかわいく鳴かれると、相手は全力で攻撃できなくなるんだ！」

タヌキが離れたおかげで木から降りられた男性が、そう言いながらドタドタとこちらに走つて来る。

「大丈夫でしたか？」

「いやあ、助かったよ。もうあのままジグザグマにぼこぼこにされてしまうのかと……」

「ジグザグマ？」

「あのポケモンの名前さ」

「ザグウー……！」

そう言う男性の方を見ながら、ジグザグマとやらは威嚇する様な唸り声をあげている。

「……なんか怒つてません？　何か怒らせる様なことしたんですか？」

「…………実はフイールドワークに夢中になつてて、彼の尻尾を踏んづけちゃつて」

「ザグッ！　ザグザグー！」

「アチャモ、攻撃中止！　このオツサンが悪かつた！　そいつに罪はなかつた！」

「チャモ？　チャモー……」

アチャモはやれやれという感じで構えをといた。流石ポケモンというべきか、人の言葉も完全に理解しているみたいだ。ならばジグザグマも言葉が分かっているのではないだろうか。

「ちよつ、見捨てないでおくれよ！」

「さすがに罪のないジグザグマを攻撃することはできません！　まずアンタはそいつに謝つとけ！」

「うつ、それは確かに……」

痛いところを突かれたと、男性はオドオドとジグザグマに近づいて

いき、頭を下げる。

「尻尾を踏んじやつてごめんね、これからはもつと注意するよ……」

「ザグザグッ！ ザグー、ザグ、ザーグ！」

「反省します……」

「（なんて言つてんのかわかんねえ……）」

雰囲気的には、どうやら説教でもしているんだろうか。ザグザグ言われてもわからないんだが、あのオツサンはわかるのだろうか……いや、わかってはいなさそうだ。

「チャモチャモ」

「ん？ おお……」

足元にアチャモが寄つて来て、自分を見上げていた。

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

超絶かわいい。

黙つてアチャモを抱き上げる。フカツとしていて、しかもポカポカと暖かいポケモンだ。

片手で抱きつつ、頭を撫でてみる。

「チャモく……」

「…………ふへつ」

変な声が漏れてしまつた。

「あー、ちよつといいかい？」

「!?」

「いや、そんなに驚かなくても……」

さつきまでジグザグマに説教をされていた男性が、苦笑しながらこちらを見ていた。視界のはしには、何かをくわえたジグザグマが去つて行くのが見える。

「お詫びに木の実を譲つたんだ。彼には悪いことしちゃつたよ」

「ああ……まあ、解決したなら良かつたですよ」

「うんうん、きみのおかげで互いに傷つかずすんだしね。本当に助

かつたよ、ありがとう！ この辺りにはよくフィールドワークで来るから、ポケモンたちと関係が悪くなるとわたしも困っちゃうんだ

「ポケモン……そつか、ポケモンがいるんだよなあ……」

「きみにぜひお礼がしたい。こんな所ではなんだから、ちょっと研究所まで来ておくれよ」

「研究所？」

「ミシロタウンにあるわたしの研究所さ。おつと、そういえば自己紹介がまだだつたね！ わたしはポケモンの分布を調査しているオダマキ！ でも皆からは『ポケモン博士』と呼ばれているよ。きみの名前は？」

「俺は……」

「チヤモツ」

抱いていたアチャモが鳴いた。

キラキラ光る黒い瞳を持つた、見たこともなかつた生き物が自分を見つめている。この世界が自分がいた世界とは違うという証拠を、自分は今抱き上げている。きっと誰も経験したことがないような出来事に、自分は遭遇している。

胸の底から湧き出てくる様な不思議な感情を覚えながら、アチャモを一撫でした。

「俺の名前は……コウイチです」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆

そんな彼らから遠く離れた木の上に、白い影があった。その影は一部始終を見届けたあと、人間に姿を見られる前にその場を去つていく。

コウイチが影に出会うのは……もう少し後の話だ。

ミシロタウン①

コウイチは現在、オダマキ博士とミシロタウンとやらへ向かつている最中である。アチャモはまだモンスター・ボールに戻つておらず、腰掛ける様に器用にコウイチの肩に座つてている。若干重いのだが、頬をくすぐるフカフカの毛並みのことを思えば些細なことだ。

「ふふふ、もうそのアチャモとはずいぶん仲良しになつたね」「そうですか？」

「チャモ？ チヤモ、チャモチャー！」

「うんうん……なんて言つてんのかワカンネ」

「チャモツ!?」

「そういえばきみはモンスター・ボールの使い方を知らなかつたけれど、トレーナーじゃなかつたのかい？ その格好はどう見てもトレーナーだけど」

「えーと、違うはずなんですけどねえ……」

「……もしかして、ワケありな感じ？ わたしで良かつたら力になるよ」

「それは……すぐ助かります」

なにせ、何の前触れもなくこの世界に連れてこられた身だ。何がで起きるかも、何をすればいいのかもわからない。この申し出を断るのは愚策である。ぜひとも今後の相談をしたいところだ。

もつとも、ゲームだのアニメだのの話はやめといた方がいい気がする。内容が内容だけに、どんな反応が返つてくるのか怖くて話せない。その辺りのことは隠しておこう……

「おつと、そんな話をしている間に到着したよ。ここがミシロタウンだ」

「おおっ、これは……なんというか、癒される風景」

「チャモチャモ！」

「はは、気に入つてくれたみたいだね！ ここは都会の様なにぎやかさはないけど、どんな色にも染まらない素敵な町さ」

森を抜けた先にあつたミシロタウンは、一言で言つてみれば『田舎』ではある。地面はアスファルトで舗装されていないし、高いビルも見当たらない。ただ、建物や町の雰囲気は古臭いわけではなく、時間が穏やかに流れている様な、ゆっくり散歩でもしたくなる様な、そんな空気がする町だった。

「さあさあ、わたしの研究所まであと少しだ。こつちだよ」

そう言うオダマキ博士について行くことしばし。視線の先には煙突付きの、他の家よりも大きい建物が見えてきた。外見は研究所というよりは、大きいだけの普通の家に思える。

「こ」がわたしの『オダマキポケモン研究所』だ。おーい、帰つたぞー」しかし研究所の中に入つてみると、それが勘違いであつたことがわかつた。ファイルがギュウギュウに詰められた棚や何かの計算を続いているパソコン、何に使うのかよくわからない様な大きな装置も置いてあつたりして、確かに研究所っぽい所である。

オダマキ博士が声をかけると、奥から研究員らしい白衣の男性が出てきた。

「ああ、博士ですか。おかえりなさい。調査はどうでしたか？」

「いやあ、大変だつたよ……しかし興味深い出会いはあつたよ！」

「おや、そちらの方はトレーナーさんですか？」

「どうも」

「チャモ」

「彼はコウイチくんだ。わたしがジグザグマに追いかけられている所を助けてもらつてね」

「まーたポケモンを怒らせちやつたんですか……あんまりそそつかしいとハルカさんに叱られちゃいますよ」

「すっかり家内に似てきちゃつたもんなあ……で、そのハルカは今いるのかい？」

「ハルカさんならまだ103番道路から帰つていませんよ。でも、そろそろ戻つてくる頃かと」

「そうか、ありがとう。邪魔して悪かつたね」

「お気になさらず。何かあつたら呼んでください」

そう言つて部屋の奥へと戻つていく研究員を見送りつつ、オダマキ博士は手近な机にのつた大量の紙束をどかせていく。

「散らかつていて悪いね。とりあえずそこに座つて、座つて。今コーヒーでもいれてくるよ」

「あ、お構いなく」

「チャヤモチャモ！」

「ああ、アチャモはミルクの方が良かつたよね。ちよつと待つててよ」
外から帰つて来たらコーヒーで一服するのが好きでね、なんて言いながら、オダマキ博士は大きめのコーヒーメーカーの方へ歩いて行く。

コウイチがボロくなつた回転椅子に腰かけると、膝の上にアチャモが飛び乗つて來た。目尻が下がつてくるのを自覚しつつ、アチャモの首元を撫でてやると、目を細めてされるがままになつてている。もう最高に頭がおかしくなりそうなコウイチであつた。

「おいおい、随分とだらしない顔になつているぞ？」

「はつ……」

苦笑いするオダマキ博士の手元のトレーには、マグカップが3つと牛乳パック、コーヒーシュガーがのつてゐる。

「砂糖とミルクは好きなだけどうぞ。ほら、アチャモ」

「アチャ♪」

ストローの入つたミルク入りカップを、アチャモは器用に羽で挟んで受け取り、チュウツと吸い上げた。マジでかわいい。

コウイチも砂糖とミルクを投入したコーヒーを一口飲むと、不思議と一息つけた、という気分になつた。良い出会いは確かにあつたが、突然放り込まれた状況にはやつぱり疲れていたのだ。

「さて、色々聞きたいことはあるけど、まずはもう一度お礼を言わせてもらうよ。さつきはありがとう、コウイチくん」

「ああ、いえ、たいしたことじやないですよ」

「いやいや、あの解決法はなかなかとれないもんだよ。結構力づくで話を解決させるトレーナーも多くて……さつきも聞いたけど、きみはトレーナーじゃないのかい？」

「……はい、違う、と思います」

「トレーナーカードは持っていないのかい？」

「トレーナーカード？」

「ポケモントレーナーなら皆持っている、身分証明書だよ。胸の内ポケットなんかに入つてない？」

「えつと…………ないですね」

「（カバンなんかもないし、まつたくの手ぶらか）…………どうしてあそこにいたのか聞いても？」

「それが、よくわからないんです。気が付いたらあそこにいて……困っていたところで博士の悲鳴を聞いたので」

「こうして会つたと。ふむ……」

そう言つて、オダマキ博士はカップを置き、腕を組んだ。

「きみはどこの町の出身かな？」

そう聞かれて元の世界の出身地を教えたが、当然オダマキ博士には聞き覚えがなく、ますます難しい顔になつてきた。

「うーん…………もう一つ気になつていたが、ポケモンは触つたことがあるのかい？」

「いや、ないですね……」

「……知つてはいた？　例えばテレビとか雑誌とかで」

「……あ、そうですね。実物は初めて見ました」

最初、コウイチはアニメだのゲームだの話は全くするつもりがなかつた。しかし考えてみると、この世界だつてポケモンに関するアニメやゲームぐらい存在しているだろう。

「（大きい町に住んでいて、ポケモンのことも知られているのに、実際に見たことはないなんて……そんなことがあるんだろうか。いや、もしかしたら……）」

考え込んでいるオダマキ博士をハラハラしながら見ていると、チャモー、という鳴き声が聞こえてきた。膝の上のアチャモが空になつたカツブをコウイチに差し出している。

「……どした？」

「チャモチャモ！」

「うんうん……わかんね」

「チャモツ!?」

「いてつ、いてつ、つつくなつつくな！」

「チャモー！」

「待て待てわかつたわかつた！　おかわりだろ！　おかわりが欲しいんだろ!?」

「チャモ！」

まつたくもう！　といった風のアチャモのカツプにミルクを注いでやると、機嫌を直してまたそれを飲み始める。そんなアチャモの頭を撫でてやつていると、オダマキ博士の微笑ましいものを見るよう目に気が付いて、なんだか居心地が悪くなってしまった。

「きみはポケモンが好きなんだなあ」

「そりゃあ、こんなにかわいいやつですしね」

「……考えてみたんだが、ちよつときみの気分が悪くなるような話をしなくちゃいけない。あくまでわたしの予想なんだが、かまわないかい？」

「……お願ひします」

「まず、きみがこの地にやつてきたのは、間違いなくポケモンのしわざだろうね」

オダマキ博士はそう切り出した。

「きみが体験した神隠し的な出来事は、昔からよく言われている。今でも「こくたまにニユースになつたりするが、おそらくはポケモンの『テレポート』という技でここへ来たんだろう」

「……は？　『テレポート』……？」

「エスパータイプのポケモンが使える技だ。熟練したポケモンが使えば、長距離も一瞬で移動できる」

「はあ、なるほど」

いや、距離どころか世界が違いますよ、とは言えないコウイチである。

「それだけじゃない。申し訳ないんだが、きみが話してくれたような町に一匹もポケモンがないなんて、普通じや考えられないんだ。だ

から……わたしは、きみが何らかの記憶操作を受けているんじゃない
かとにらんでいる」

「……（ポカーン）」

「これも昔からよくある話なんだ、エスパー pokémon が原因の記憶喪失とか催眠術なんてのは。きみをここに送り込んだ pokémon がきみの記憶、たぶん pokémon に関する記憶を改変した可能性は十分あります」

え、ええー……マジですか。だとしたら、なんでこんなぶつ飛んだ設定にしたのか……とは当然言えないコウイチである。オダマキ博士の勘違いは、コウイチにとつて都合が良いと言えば都合が良かつた。

複雑な気分になつたコウイチの顔を何ととつたのか、オダマキ博士が話を続ける。

「だけど、犯人に悪意があつたかというと、それも疑問なんだ」「どういうことですか？」

「きみの服や靴はどう見ても新品そのものだ。持ち物は何もないけど、これから旅を始めるにはいい服装だと思う。そして、ミシロタウンは旅を始めるなら、ここホウエン地方で最も適した町と言えるだろう。強くて凶暴な pokémon はあまりいないし、次の町も近い。きみがここにやつて来たのは、きっと偶然じゃないんだろう。誰かがきみの『始まりの町』として、ここを選んだんだ。たぶん、善意で」

それを聞いて、いつたいどんな反応をすればいいのか。コウイチにはわからなかつた。ワケのわからないことをしやがつて、と怒ればいいのか。ポケモンの世界に来たんだ、と嬉しがればいいのか。それとも、何者かが自分を隠れ見てているのかと怯えればいいのか。呆然とするコウイチの胸に、フワリとした物が当たる。

「チャモー……」

「……」

こちらを見上げているアチャモだ。なんとなく、心配そうな顔をしている気がする。

（ただの動物よりずっと表情が豊かなんだな、 pokémon って）

一回、二回とアチャモの頭を撫でる度に、心が落ち着いてくる。こいつに出会えた、ということには感謝をしなければいけない、かもしれない。

「ごめんよ、かなりショッキングなことを言つてしまつた」

「いえ、いいんです。きっと気付いておいた方がいいことなんですよ」「きみをここに連れて来た犯人は、きみに何かを期待しているんだと思う。突飛な考えだけど、きみにはもしかしたら、役目というべきものがあるのかもしねりない」

「役目、ですか……」

話し終えたオダマキ博士は、飲みかけのカップを手にとる。それを見たコウイチも、同じくカップをとり、ぬるくなつたコーヒーを飲み干した。

「……ふう」

一緒に一息をついた二人は、顔を見合させて苦笑した。

「よし、決めたぞコウイチくん！ ゼひきみにお願いしたいことがある！」

「へつ、なんです急に？」

「アチャヤ？」

「実は最近、研究をもう一段発展させようと思っていたんだが……」

オダマキ博士がそう切り出した時だつた。

「ただいまー！」

玄関の方から、女の子の元気な声が聞こえてきた。

「おっ、良いところに帰つて來たな！ コウイチくん、一度娘のハルカに会つてみてくれ。ついでに、トレーナーがどんなものか教えてもらうといいでぞ！」

ミシロタウン②

「たつだいまー！ 今日の103番道路、なんだか変な感じだつたよ。キヤモメがいっぱい飛んで……あれ、お客様？」

「おかえり、ハルカ。彼はコウイチくん、さつき101番道路で出会つたんだ」

「えつと、はじめまして。紹介にあずかつたコウイチだ、よろしくね」「あ、もしかしてトレーナーさん？ はじめまして！ あたしはハルカです。よろしくお願ひしますね！」

やつて来たのはとても活発そうな女の子だつた。動きやすそうな服を着ていて、頭に巻いた緑のバンダナからは、彼女の茶髪が左右にピヨンと伸びている。

「で、コウイチくん。この子は私の娘のハルカだ。わたしを手伝いながらポケモンの調査をしてくれているよ」

「へー、この年で。しつかりした子なんですね」

「えへへ、それほどでもないですよ。あ、それよりも気になつてたんですけど、そのアチャモつて……」

「チャモ！」

「うん、ウチのアチャモだよ。色々あつて、見ての通り今は彼に懷いているんだ」

「やつぱり」

「あつ、なんかすみません。ずっと放さないで……」

出会いつてから今まで夢中になつて触っていたが、考えてみればアチャモはオダマキ博士のポケモンだ。人のポケモンをいつまでも放さないのはあまり良いことではないだろう。

「いやいや、いいんだよ。アチャモもきみのことが気にいつているようだしね」

「チャモ。チャモモー」

なんて言つてゐのかさっぱりわからないが、オダマキ博士の言葉を肯定しているような気がしないでもない。

「さて、ハルカ。帰ったばかりで悪いんだが、お前のポケモンはまだ元気か？」

「え？ うん、今日は野生のポケモンとも戦つてないし、元氣いっぽいだよ。……ああ、もしかして！」

「うむ、これからコウイチくんとアチャモの相手をしてほしい！」

「マジすか」

「チャモツ」

オダマキ博士の発言は唐突ではあつたが予想はできていたので驚きはしなかつたものの、やはり初のトレーナー戦となると不安もある。しかしどうやらアチャモの方は気合十分、既に膝から飛び降りてやる気満々だつた。

「もちろんオッケー！ よーし、じゃあ早速外に行きましょ！」

「おつとハルカ、その前に一つ用事を済まさせてくれよ」

「用事？ 何かあるの？」

「すぐ終わるよ。コウイチくん、写真を一枚撮らせてほしい。そこに立つて、立つて」

「写真？ 別にいいんですけど……ここですか？」

「そうそう。で、背筋をピシツと……よし、じゃあパシャツと」

オダマキ博士は近くにあつたカメラでコウイチを撮つた。画像を確認して頷いているところを見るに、良い写真が撮れたようだ。

「なんだつたん？」

「それはあとのお楽しみさ。ハルカ、おまたせ」

「あ、もういいの？ ジヤあ改めてレツツゴー！」

「ちょ、ちょっと待てよ……」

「さあさあ早く早く！」

ハルカは詳しい話も聞かずに、コウイチの手を引っ張つて行く。機嫌良さげに歩くハルカの隣で、アチャモもチャモチャモと歌いながらついて行つてゐる。この一人と一匹は随分ポケモンバトルが好きみたいだ。

さて、そうして連れてこられたのは研究所の裏手。人もいないし広さも十分あるので、ポケモン達が動き回るには良いフィールドだ。コ

ウイチとハルカは互いに距離をとつて向き合っている。遅れてやつて来たオダマキ博士が審判を務めるようだ。

「二人とも、準備はいいかい？」

「……OKです！」

「いつでもどーぞ！」

「では……ゴホン、お互に使用ポケモンは一体のみ！ 二人とも、ポケモンを出して！」

「よーし、頼むぞアチャモ！」

「チャモチャモー！」

「お願い、ミズゴロウ！」

「ゴロー！」

「おおっ、なんだありや！」

ハルカが投げたモンスター・ボールから、青いポケモンが飛び出してくる。ミズゴロウと呼ばれたそのポケモンは、昔コウイチが見たことがあるウーパールーパーに似ていないでもなかつた。そして、やつぱりカワいい。後で触らせてもらえないだろうか。

「両者、悔いのない戦いをするように！」

「はつ、いかん。集中集中……！」

「それでは……バトル開始！」

「油断してたらいいきなり終わっちゃうわよ！ ミズゴロウ、『水鉄砲』！」

「（スウー）……ゴロオー！」

「げ、かわせアチャモー！」

「チャモー！」

息を吸い込んだミズゴロウの口から、勢い良く水が放たれる。アチャモは危ういところでその『水鉄砲』をかわして見せた。姿と名前から予想できていたが、案の定ミズゴロウは水タイプだつた。炎タイプが水タイプに弱いことは、コウイチでも知っている。アチャモは炎タイプなので、下手すると一撃でやられる可能性があつた。

「むむつ、おいしい！ ミズゴロウ、もう一度『水鉄砲』よ！」

「ゴロー！」

「（幸いアチャモはすばしっこい！ 十分距離をとつておけば、あの水鉄砲も回避できそうだが！）アチャモ！ 動き回りながらこっちも

『火の粉』だ！」

「チャモー！」

アチャモは小さな炎の塊をいくつも吹き出したが、水流とぶつかり合うと一瞬で消えてしまう。

「やべえ、相性がマズすぎる！」

強いポケモンだと、水流を一瞬で蒸発させるほどの炎を吐くこともあるが、当然このアチャモはそうではない。

「威力はこっちの方が強いよ！ ミズゴロウ！」

「ゴロロツ！」

「動きを止めるな！ 狙い撃ちにされるぞ！」

「アチャーツ！」

「（仕方ない、撃ち合いがダメなら接近戦だ！ だけど近づくためにはどうしたら……）」

「うー、すばしつこいんだから！ ミズゴロウ、『水鉄砲』！」

「ゴー……ゴローツ！」

「（……おつ？）」

ミズゴロウの攻撃を見ていてあることに気が付く。『水鉄砲』を使う前に、ミズゴロウは大きく息を吸い込んでいるのだ。

「（スキ発見か？ 打ち終わつた瞬間に接近すれば……いや、それだけじゃ間に合わない！ なら！）」

「ミズゴロウ、このまま体力を消耗させましょ！ 『水鉄砲』！」

「（スウー）……ゴロー！」

「アチャモ！ 『水鉄砲』を出し終わつた瞬間が勝負だ！」
「チャモ！」

「むむつ！ 何かするつもりね!?」

だが、ハルカが狙いを察するより先に、ミズゴロウの攻撃が終わる。

コウイチはその瞬間を見計らい、

「今だアチャモ！ 『火の粉』でひるませながらミズゴロウにダーツシユ！」

「チヤモチヤモチヤー!!」

「接近してきた!! ミズゴロウ、『水鉄砲』で迎え撃つて!!」

「ゴー……「チヤモー! (ボボボボツ!)」ゴロオツ?!」

ミズゴロウは『水鉄砲』を撃とうとしたが、『火の粉』の直撃によつて呼吸が間に合わず、撃ち損ねてしまう。

「相性は不利でも、当たればちょっとは効くだろ!! 今だアチヤモ!!」

「チヤモーツ!!」

その隙に一気にアチヤモが接近する!

「ひつかく』だ!!」

「チヤモオ!!」

「ゴローツ!!」

「しまつた、ミズゴロウ!??」

アチヤモの攻撃が命中し、ミズゴロウが吹っ飛ばされる。

「まだだ、油断せず再接近!!」

「頑張つて、ミズゴロウ!!」

「ゴロツ……!!」

ミズゴロウは歯を食いしばりながら、体勢を整えてみせる。そこへ追撃をかけるアチヤモ。

「もう一度『ひつかく』だ!!」

「(『水鉄砲』は間に合わない、だつたら!)ミズゴロウ、『体当たり』!!」

「チヤモー!!」

「ゴツ、ロー!!」

アチヤモが振り下ろした足の爪と、頭から突つ込んで来たミズゴロウが激突する。一瞬の拮抗の後……大きく弾き飛ばされたのはミズゴロウの方だった。十分な助走が足りなかつたため、体当たりに威力が出なかつたのだ。

「ああっ、ミズゴロウ!!」

地面を滑つていったミズゴロウは、今度は立ち上がることはなかつた。そこにオダマキ博士が走り寄つていく。

「ゴロー……!!」

「……目を回しちゃつているね。これは勝負ありだ」

「ということは……」

「この勝負、コウイチくんの勝ちだ！」

「……よつしゃ！ よくやつたぞアチャモー！」

「チャモー！」

喜ぶコウイチの胸にアチャモが飛び込んでくる。よしよし！ と頭を撫でてやると、ふふん、というような得意げな顔をした。

「すごいすごい！ コウイチさん強いじゃない！」

「わはは、それほどでもない！」

ミズゴロウを抱き上げたハルカが、興奮気味に近づいて来た。

「あたし、お父さんがあなたのことを注目するのもわかるような気がする！ だつて、会つてすぐのアチャモがもうあなたに懐いているもの！ あなたならどんなポケモンとでも仲良くなれるかも！」

「お、おお？ そこまで言われるとなんか照れるな……」

「ふふふ、初めてのトレーナーバトルでハルカに勝つだなんて、スゴいじゃないかコウイチくん。ハルカはかなり前からわたしの研究を手伝つていて、トレーナー歴は結構長いんだよ！ よーし、これはいよいよ期待できそうだぞ！」

「期待？ なんのことです？」

「それはこれから説明しよう！ ハルカ、家に帰つてお母さんに、今晩一人お客様を泊めたいと言つておいてくれないか？ 後で彼を連れしていくからさ」

「それいいかも！ でもお父さんも、普段からちゃんと家に帰つて来てくれないと、お母さんに愛想尽かされちゃうよ？」

「はは、耳が痛いね……」

「ハルカちゃん。オダマキ博士つて、あんまり帰つて来ないの？」

「そーなんですよ。いつも研究所に寝泊まりしてて、最後に帰つて来たのはいつだつたかなあ……お母さん、きっと怒つてるなー？」

「ううつ……ハルカあ」

「……あはは、冗談冗談！ お母さんにはちゃんとフォローしておくから。じゃあコウイチさん、また後で！」

軽くオダマキ博士をからかつた後、元気良く走り去つて行くハルカ

を手を振つて見送る。オダマキ博士も苦笑しながら小さく手を振つていた。

「良くてきた子ですねー……」

「家内の育て方が良かつたんだよ。わたしの手伝いをしていたせいか、ちょっとお転婆になつてしまつたけどね？」

そう言つて、オダマキ博士は研究所の方へ歩いて行く。

「じゃあ、もう少し話に付き合つてもらおうかな。さつきも言つたけど、実は君にお願いがあつてね」

「そりいえば確かに言つてましたね。俺にできることなら構いませんよ」

研究所に戻つたら、再びコーヒーで一服し、オダマキ博士が話しだす。

「自己紹介した時、わたしが何の研究をしているかは教えたよね？」

「はい、確かポケモンの分布調査、とか」

「そりそり。どこにどんなポケモンがどれだけ住んでいるのか、タイプや強さの偏りはどうか、なんかな。ただ、わたしも年だからね。バトルも強くないからあんまり遠出することもできなくて、今の研究が停滞気味だつたんだ。ハルカも手伝つてくれていたけど、一応調査は近場でやつてもらつていたしね」

「……なるほど？」

「……チャモチャモ？」

「ふふ……そこでだ。最近ハルカもいい歳になつたから、いよいよこのミシロタウンから旅立つことになつたんだ」

「へえ！ それはハルカちゃんも喜んだんじゃないですか？」

「うん。ホウエン中のポケモンを見るんだーつて、気合十分だつたよ。ただ、ハルカは才能がある子だけど、あの子だけに任せても、それはそれで調査に偏りが出てしまう。だから……良かつたらきみも、わたしの研究を少し助けてくれないかい？」

「それって、つまり……」

「いちトレーナーとして、広い世界へ旅に出る、ということだよ。そのアチャモと一緒にね」

「…………」

旅行なら、したことがある。家族旅行や修学旅行。身内と、友人達と、何泊何日のちよつとした遠出。知らないものも色々と見て、聞いた。しかし、今回は、それとはまるで違うということが容易に察せられる。旅だ。それも、一生に一度もないような。今、膝の上に乗っている小さな相棒と共に、きつと今まで以上に見たことも聞いたこともないもの見て、聞いて……色んなポケモンに出会う。そんな旅。「……アチャモー、どうする？ 旅だつてよ」

「チャモ？ チヤモツ！」

「きつと危ない所とか、ヤバいポケモンとか、いっぱいだぞー」

「チャモチャモツ！ チヤモチャー！」

ヒラリと膝から飛び降りたアチャモが、短い足で空を蹴つてみせる。

「チャーモツ（シユツシユツ）、チャーモツ（シユツシユツ）！」

「おおつ、そうかそうか！ ……さっぱりわかんね！」

「チャモオツ！ チヤモー！」

「わははは、でも凄く頼もしいぞ、アチャモ！ だからつづくなつくな！」

「チャツ、モツ、チャツ！ （ツンツンツン）」

「（本当に仲良くなつたなあ、二人とも）」

コウイチは怒れるアチャモをなんとか宥め、改めてオダマキ博士に応える。

「オダマキ博士。その提案、受けさせてもらいます。俺達にドーンと任せてください！」

「チャモツ！」

「おおつ、そうか！ きみならそう言つてくれると思つていたよ！」

「あつたり前ですよ！ こんな機会はそうそうないんですからね！ な、アチャモ？」

「チャーモチャーモ」

「（……やっぱり似てるなあ、ウチのハルカに）」

コウイチが初めてポケモンに出会つた時に見せたキラキラした目

も、旅に出ると聞いて疼かせていた好奇心もそつくりだつた。彼もまた、間違いなくポケモンが好きで、知りたくて知りたくて仕方がない人間なのだ。そんな人間が、この話を断るはずがない。

「せつかくアチャモがきみの相棒に決まつたんだし、どうだろう、ニックネームでもつけてあげないか？」

「ニックネーム。ニックネームか……」

「チャモモチャモモー」

良いやつをお願い！ と言つているような気はするが、果たしてコウイチのセンスは。

「んー…………じゃあチャモモチャモモ言つてるから『チャモモ』で」

「チャモ？ チャモ？…………？」

アチャモ改めチャモモ、若干納得しかねていてる様子だ。

「あつはつは、ニックネームなんてそんなものさ、チャモモくん」「はは、いいじやんわかりやすくて！ ほらほら撫で撫でしてやろう」
「チャモ？…………」

「ふふふ、めでたく名前も決まつたところで、早速きみにトレーナーとしてのイロハを教えるぞ」

「えつ、これからですか？」

「そうだ！ しかも目標は明日出発！」

「明日あ？！」

「はつはつは、実はハルカの出発も明日でね。どうせなら二人同時にスタートするつてのも面白いんじゃないかと思う！」

「いや、それはそれで面白いですけど、急過ぎやしません！ 旅なんて言つたら、覚えることとか道具とか色々と……」

「それなら問題はないとも！ ちよつと待つてくれよ」

そう言つてオダマキ博士は研究室の奥へ入つて行く。

——えーと、たしか荷物はあそこにまとめてあつたはず…………あつたあつた！ うーん、しかしこれはいけるかな……いや、大丈夫だろ。よーし、せーのつ（ドサドサドサツ）おわーつ！ ……あいたたた、酷い目にあつたぞ。あと、あの本はどうだつたか……おつ、ラツキー。埋もれてたのが出て来たみたいだ。

何やら慌ただしいことになつて、いたようだが、なんとか無事に帰つて来たオダマキ博士が持つていたのは、一冊の本と古いバツクパツクだつた。

「なんなんですか？」

「チャモ？」

「ふふーん、まずはコイツを見てくれ！」

そう言つて見せてきた、まだ新品同様に綺麗な本には、『トレーナーズガイド』と書かれている。

「これは新しく旅に出るトレーナー達の必需品！ 旅先で必要なことやトラブルの対処法など、様々なノウハウをまとめた本さ！ 知つておくべきことはだいたい書いているから、コイツを見ながら旅の仕方を学ぶといいだろう」

「へー！ そんなものあるのか……」

携行しやすいようにか、小さめな本をパラパラとめくつてみると、中には情報がギッシリ詰まつてることがわかる。確かに必需品というのも納得できることだつた。

「そしてこれ！ 旅に必要な道具はほとんどここに入つてているよ！」

ドンツ、と目の前に置かれたバックパックは若干色褪せているが、なんだかんだで手入れはきちんとされていたのか、汚いという印象はない。どうやら色々な道具が入つてているようだ。

「これはわたしがよく遠出する時に使つていたものなんだ。今はもつと小型なバッグが出始めているけど、買った当時はこれでも最新のやつだつたし、今でも十分に使えるバッグだ！ 中には旅で必要なものが詰めてある。ぜひ、これを貰つてほしい！」

「ええっ！ これ、結構思い出があるものなんじやないんですか？ そんな、俺なんかに……」

「どうせ今となつては使わなくなつた道具さ。ハルカには新しいバッグを用意したから、このバッグもいよいよ用済みかと思つてたんだが、どうやらまた日の目を見ることができそうだよ！」

バッグを開けてみると、出てくる出てくる。小さく丸められたメントに始まり、雨具、調理器具、文具、救急セット、双眼鏡……その他

色々。どれも使い込まれているが、なぜか魅力的に見えてくるそれらに、コウイチとチャモモは目を輝かせる。

「わたしのお古で悪いけど……」

「いやいや、そんなことないですよ！　すぐ嬉しいですよ、これは！」

「チャモツ！」

「そう言つてもらえると、こつちもありがたい。さつきも言つたように、必要なものはだいたい揃えてあるけど、それでも旅先で欲しいものは出てくるだろうから、それはその都度対応してくれ。最新のものに変えたいって時は遠慮なく捨ててくれても構わない。もうそれは君のものなんだからね」

「捨てるのはなあ……」

「躊躇つちやう？　なら、そんな時は『道具預かりシステム』を使うといい」

「道具預かりシステム？」

「全国のポケモンセンターに置いてあるパソコンから、道具を自由に預けられるのさ。『ポケモン預かりシステム』を元に作つたらしきけど、ありやあ便利なもんだ」

「そんなものまであるのかあ……」

「ただ、どつちのシステムもトレーナーカードがないと使わせてくれないから注意するんだよ？」

「例の、身分証明書ですか？　俺持つてないんですけど……」

「安心してくれ。既にわたしが申請してあるから、明日には君のトレーナーカードが発行されるぞ」

「えつ、いつの間に」

「きみとハルカのバトルの前に、チヨチヨイとね！　ウチの研究所では旅立つトレーナー達の支援もしているのさ。住んでいた場所はわからないみたいだから、住所はミシロタウンということにしておいたよ」

「何から何まで……本当にありがとうございます」

「なあに、これも依頼料と思つてくれたらしい。そして……何と言つてもコイツが最重要アイテム！　研究のために取り寄せた、この『ポ

ケモン図鑑』をきみにあげよう！」

「おおおつ!? これがポケモン図鑑！」

「おつ、どんなものかは知つてゐるのか?」

「え、ええ、実物は初めて見ました」

「そうかそうか。一応説明しておくと、そのポケモン図鑑はきみが出会つたポケモンを記録していくつてくれるハイテクな道具なんだ！ ハルカもその図鑑を持つていてあちこちに遊びに行くんだな。で、珍しいポケモンを見つけて図鑑に記録できるとだね、ファイルドワーカーをしているわたしを探し出しては見せてくれるんだよ！」

「色んなポケモンか……そうだ、早速チャモモに使つてみてもいいですか？」

「もちろんだよ。じゃあチャモモくんに先を向けて、このボタンを押してみな」

「どれどれ……」

「チャモオ～……（ビシツ）」

「わはは、決めポーズはいらないぞ」

格好をつけるチャモモに向けて図鑑を操作してみると、画面にチャモモの姿が映り、それに合わせて音声が流れ始める。

『アチャモ。ひよこポケモン。体内に炎を燃やす袋があるので、抱きしめるとポカポカ暖かく、口から吐き出す火の玉は1000度にもなる。周りが見えなくなってしまうような暗闇は苦手のようだ』

「ほほー……お前怖つ」

「チャモツ!?」

「いや、1000度の火の玉つてお前、どんな身体してんだ」

「チャーモツ（フフン）」

「（どう考へてもヤバい生き物だけど、やっぱ可愛いんだよなあ……）」「とまあ、こんな感じで使いながら、色々なポケモンを記録していくつてくれ」

「うつす」

「さて、時間もないし、これからトレーナーになるきみに、一通りの知識はミツチリ教えていくぞ！」

「よろしくお願ひします！」

「チャモ！」

オダマキ博士の授業は、そのまま辺りが暗くなるまで続いた。体験談を交えた旅の仕方も実に参考になつたが、とりわけ彼が見てきたポケモンの話には、コウイチも夢中になつた。家より大きいポケモンだの、周りの色に同化して姿を消すポケモンだと、興味が尽きない。

研究所を出た時にはすっかり夜になつてしまつていたが、オダマキ博士の奥さんやハルカ、それにハルカの弟くんは嫌な顔一つせずに迎えてくれた（オダマキ博士は影で奥さんに、普段の行いの件で怒られていたが。笑顔が怖いと思ったのはこれが初めてかもしれない）。心を尽くした料理を味わつた後、ハルカや弟くんと一緒に受けたオダマキ博士の追加授業も大いにためになり、ポケモンの話で盛り上がることになつた。

そして、長く短い夜が明ける。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「二人とも、今日は良い出発日和だぞ！ 準備は万端かい？」

「はい！」

「よし、良い返事だ！ じゃあ行つてらつしやい！」

「身体を壊さないように気をつけなさいね！」

「お姉ちゃん、コウイチさん、行つてらつしやーい！」

本日も見事な晴天。旅のスタートを切るにはいい天氣だ。忘れ物がないかしつかりと確認したし、にわか仕込みだが知識も詰めた。ハルカの家族に見送られながら、二人で歩を進める。

「コウイチさん！ わたし、ミズゴロウ^子と一緒にポケモン図鑑を埋めながら、ホウエン中の……いや、世界中コンテストで優勝して、世界一のポケモンコーディネーターになるわ！ あなたの夢も教えてよ！」

「俺は……」

「チャモツ」

「おつと」

肩に飛び乗つて来たチャモモと目を合わせて。

「俺は、コイツと一緒に自由に旅して、色々なポケモンに出会いたい。今はそれが俺の夢で、今日がその第一歩だ！」

「チャモチャモオツ！」

「フフフ……なら勝負よ！一緒にスタートしたわたし達のうち、どつちが先に夢を叶えられるかのね！」

「勝負だ～？いいのかあ？こつちは何年かかってでも叶えるつもりだからな！」

「それはこつちも同じこと！わたしも何年かかつたつてぜろくつたいに諦めませんからね！」

「ふつふつふ」

「チャモチャモ……」

「ゴロオ～……」

前向きなんだか後向きなんだかわからない二人の宣誓に、相棒の二匹は呆れ顔だ。一通り二人で笑い終わつたところで、いよいよミシロタウンの出口につく。ハルカは自分の自転車を持って来ていたので、徒歩のコウイチとはここでお別れだ。

「じゃあな、ハルカ。お前の夢、応援してるぞ！」

「ありがとう！コウイチさんもきっと、素敵な夢を叶えてね！それじゃあ、またね！」

自転車に乗つて行くハルカは、あつという間に見えなくなつてしまつた。

「うーん、最後までエネルギーな子だつたな。これは負けてらんないぞ、チャモモ」

「チャーモ！」

ついに、一人と一匹の物語が始まつた。これから先、想像もできないうな夢と冒険と出会いに満ちたここは……ポケットモンスターの世界だ。

101番道路

ミシロタウンを出発したコウイチ達は、ひとまずコトキタウンを目指して歩いていた。森に囲まれた101番道路をのんびりと歩くと、朝の澄んだ空気もあつてとても清々しい。

「あ～……なんかいいなあ、こういうの。スゲエ平和な感じだわ」

「チャーモ♪ チャーモ♪」

「（機嫌良さそうなチャモモも、超可愛い。幸せだわあ）」

歌いながらピヨコピヨコ歩くチャモモの後ろ姿を見ていると、自然と口元も綻んでくる。

「聞いた話じや、この先のコトキタウンには昼前には到着できるみたいだ。その次のトウカシティもかなり近いみたいだし、場合によつては今日中にトウカシティに行つて、ポケモンセンターに泊まろう」「チャモツ！」

「うむ、元氣があつてよろしい！」

オダマキ博士に貰つたタウンマップを見てみると、コトキタウンはミシロタウンと同じくらい小さい町だ。新しい場所なので興味はもちろんあるが、研究所やジムのような特別な施設はないらしいので、長居することもないかもしれない。コトキタウンで作られた野菜をたっぷり入れた野菜ラーメンがオダマキ博士のオススメらしいので、とりあえず昼食はそれで決定だ。

そんなことを考えていた時だ。

「（ガサガサツ）

「むつ！ チャモモ！」

「チャモ？」

「なんか今そこの茂みから音がした！ とりあえず戦闘準備！」

「アチャー！」

前に出了チャモモが、ガサガサと鳴る茂みを睨みつける。

すわ、野生のポケモンかと思ったところで飛び出して来たのは。やつと本道に出られた……って、えつ、トレーナー？ なんか身構え

てる？」

何の変哲もない普通の男性だった。

「なんだ人間かあ……」

「チャモー……」

「ちよつ、なんでガツカリされてるのさ！」

「いや、野生のポケモンかと」

「あ、ああー。ごめんごめん、変に期待させちゃって……」

「森から出て来ましたけど、いつたい何してるんですか？ 道に迷つたとか？」

「違う違う。……いや、確かにちよつと奥に入り過ぎてたけども。僕、101番道路のゴミの回収に来ていたんだよ」

「ゴミの回収？」

「チャモモ～？」

「そうは言つているが、コウイチが見たところ、男性は大きなりユックサックを一つ背負つているだけで、ゴミなどは持つていらない。」

「……怪しい」

「チャモチャ一……（シユツシユツ）」

「ちよつ、待つて待つて！ 本当なんだつて！ ゴミはもう『掃除屋さん』が集めているはずだから、あとはそれを貰つてコトキに持つて帰るだけなんだ！」

「掃除屋さん？」

「そうそう、『森の掃除屋さん』。……あ、もしかして君達、この辺は初めて來たの？」

「ええ、一応」

「チャモチャモ（うんうん）」

「そつかそつか。だつたらぜひ、君達にも彼らのことを見つてもらいたいな。今、急ぎだつたりする？」

「いや、時間なら十分ありますよ」

「よーし、じゃあちよつと僕についてきてよ！」

「……なんなんだ？」

「チャモ？」

意気揚々と、男性は茂みの中に入つていつてしまふ。普通なら無視するところだが、興味が湧いたコウイチ達は、それについて行くことにした。

先導する男性は、草をかき分けながら、ずんずんと森の中へ入つて行く。

「僕はコトキの青年団のメンバーなんだ。君はトレーナーなんだろ？」

「そうですよ」

「今もそうだけど、昔も旅をするトレーナーはいっぱいいたんだよね。で、それで何が問題になつたかというと、やっぱりゴミのポイ捨てが多い！ つてことだつたわけだよ」

「ポイ捨て？」

「旅をしているとどうしても、いらなくなつたもの、使えなくなつたものが出てくるけど、マナーが悪いトレーナー達は、嵩張るからつてそのゴミをその辺に捨てちゃつてたわけだ」

「それは……感心しないですね」

「だろ？ そのことが散々議論されたおかげで、今ではルールも厳しくなつたし、ゴミ自体が自然分解されやすい物に変えられていつたんだ」

「ほうほう」

そういうつた物はコウイチがいた世界にもあつた。代表的な生分解性プラスチックは、通常のプラスチックよりもはるかに早い速度で微生物に分解されるらしい。

「ただ、変えられないものもあるわけで、よく使われるモンスターボーリとか、キズ薬の容器とかは今でもポイ捨てが絶えないんだよね。トレーナーが足を踏み入れる土地はどこもそうだし、101番道路も例外じゃない」

「それにしては、あんまり道中でゴミは見かけませんでしたね」

「そう！ そこだ！」

「うえつ！？」

「チャモツ！？」

突如振り返った男性が、我が意を得たりとばかりにビシッとコウイチを指さした。

「コトキの周辺にはあるポケモン達が生息していてね！ 彼らはその習性上、森中のゴミを集めてくれているんだ！ 『森の掃除屋』たる所以だよ！」

「と、とりあえず落ち着いて……」

「おっと、失礼。……そういうしてるうちに目的地に着いたみたいだぞ。君達、静かにして向こうを覗いてごらん」

「向こう……？」

「アチャ……？」

小さいチャモモを抱え上げつつ、彼の言う方向を見てみると、木々が開けたちよつとした広場があり、そこにはコウイチに見覚えのあるポケモンがたくさんいた。ジグザグマの群れだ。

「お、おお……！」

「ねえねえ、あれを見てどう思う？」

「天国だ……！」

「君とは気が合いそうだ」

がつちり握手をする二人を見つめるチャモモの目は、呆れていた。

「……そうだ、こんな時こそアレの出番だ！」

コウイチがポケットからポケモン図鑑を取り出し、ジグザグマに向けてみる。

『ジグザグマ。まめだぬきポケモン。草陰や地面に埋まっているモノを見つけるのが得意。好奇心が旺盛で、いつもジグザグに歩いているのは何にでも興味を持つていてるのか』

「へー、それでゴミ集めなんかもやってるのか

「それ、もしかしてポケモン図鑑つてやつ？ 良い物持つてるね」

早速図鑑が役に立つたようだ。やつぱり便利なアイテムである。

「それで、彼らはゴミを棲み処に集めているはずだから、それを回収して町に持つて帰りたいんだけど……」

「ん？ そういうことなら交渉したらいいじゃないですか」

「いや、それがねえ……」

彼が言うには、ジグザグマ達と話をしようとして姿を見せると、あつという間に逃げられてしまうらしい。これでは交渉どころではないので、ひとまず町に帰つて仲間と相談しようと思つていたとか。「うーん、オダマキ博士を追いかけてたのはあくまで怒つてたからで、別に好戦的なタチではないってことか……」

「なんか良い案、ない……？」

「案があ……ちなみに、交渉はどーするんです？　ゴミとはいえ、あいつらが集めたものを簡単に譲つてもらえるとは思えないですが」「コトキのおいしい野菜と交換してもらうつもりだよ。このリュックにいっぱい詰めて来たんだ」

「だつたらまずは話ができると駄目か…………そーだ。チャモモ、あの群れの中に、この前バトルしたジグザグマがいるかどうか、わからかるか？」

「チャモ？　チャモ？……？」

あいにく、コウイチにはジグザグマ達の見分けがまつたくつかない。だが、もしかしたら、同じポケモンのチャモモならば大丈夫なのではないかと思つたところだが。

しばし群れを見つめていたチャモモが。

「……チャモ？　……チャモ！　チャモチャー！」

「……お、もしかして見つけたのか？」

「チャモ！」

「おお、お手柄だぞチャモモ！　よーしよし」

コウイチの考えた作戦とはズバリ、『一度バトルしたんだから俺とお前は友達ライバルだ作戦』である。成功率は知らない。

「よしチャモモ、あのジグザグマの所に行くぞ。なんかこう、『お、この前ぶりじやーん。元気してた？』みたいな感じでいけば、きっと話ぐらい聞いてくれる……といいなあ」

「チャモー……（じとー）」

「それは…………どうだろうねえ……」

「な、なんだよ、そんな目で見るなよ。いいから行くぞ、ほら」

やれやれといった感じのチャモモと一緒に、ジグザグマの前に出

る。

「ザグツ？」

「ザグザグー！」

「ザグー！ ザグー！」

「あつ、ちよつ?!」

なるほど、確かにあつという間に逃げてしまうようだ。ここまで一目散に逃げられると、コウイチの心にもくるものがある。

しかし目的のジグザグマだけはその場に残っていた。幸運なことに、コウイチか、あるいはチャモモのことを覚えていたようだ。コウイチの心のキズが少し回復した。

「ザグツ？ ザグザーグ」

「チャモ。チャモチャモチャー」

「えーっと、昨日ぶり……だな？」

「ザグザグー」

「(ポケモン語わかんねえ……)」

まあわかつてたことだが。

「んーと、なんだ。博士に踏まれた尻尾はもう大丈夫か？」

「ザグザグ！」

そう鳴いたジグザグマは、尻尾をふりふり。見た感じ、どうやら問題はなさそうだ。

「……大丈夫そうだな。あの人もこれから気を付けると思うけど、なんかしでかした時は、また思いつきり説教してやつてくれ」

「ザグ！」

「で、今日はちよつとお願ひがあつてだな……」

「ザグー？」

コウイチが手招きして呼んだ男性を見て、ジグザグマ少し警戒したようだ。

「そ、そんな警戒しなくて大丈夫だよ。えと、えーと……と、とりあえずこれを見てくれ」

「ザグ……ザグーッ！」

リュックを下ろし、大量の野菜を取り出して見せる。ジグザグマが

目が輝いた。

「君達、これまで人間の道具をたくさん拾つて集めているだろう？どうか、その道具とこれを交換してほしい」

「ザグ？ ザグザグー……」

どうやら悩んでいるようだ。少し考え込んだあと、ジグザグマは大きく鳴き声をあげた。コウイチ達がそれに驚いていると、さつき逃げ出したジグザグマ達がぞろぞろと草陰から出てくる。

「「ザグザグ？」」

「ザグー、ザグ、ザグ」

「ザグ？」

「ザグザーッ、ザグザグー」

「「ザグー……」」

鳴き声はどうしてもおまぬけな感じだが、ジグザグマ達が皆で頭をひねっているところはとても癒される。

「……なんかあと一押しつて感じだな。他に何かないんですか？」

「うーん、何かあるかな…………そうだ。ねえねえ君達。これからも君達が集めてくれたものは、今日みたいに僕が色々持つて来て交換させてもらいたいんだけど、どうかな」

「「！」」

「ザグザグ！」

「ザグ。ザグザグザーッ……」

「ザグザグ！」

「ザーグ！」

「「ザグザグー！」」

「これは……決まつたのかな？」

「さあ……？」

「ザグッ、ザグッ！」

ジグザグマ達が一斉に動き出し、森の更に奥へと進んでいく。コウイチ達に、ついてこいとばかりに鳴いたジグザグマは、たぶん昨日会ったジグザグマだ（入り混じつてしまつて、もはや誰が誰だかわからぬ）。

「これは交渉成立じゃないですか？」

「アチャー（ウンウン）」

「チャモモも頷いてるし」

「みたいだね！ よし、このままついていこう！ きっと彼らの棲み処に案内してくれるんだよ！」

よく見ると本当にジグザグに走っている面白い姿を見ながらジグザグマを追いかけていくと、ジグザグマ達が大きな一本の木の前で止まつた。その根元には洞うろがあり、ジグザグマ達はその中へと入つていき……色々なゴミをくわえて次々と出てきた。モンスター・ボール、何かの容器、使用済み技マシン、破れた服、割れた眼鏡……出てくる出てくる。溜め込んだものは、ゴミ袋二つ分ぐらいにはなりそうだ。「こんなに捨てられてんのか……」

「いや、結構昔のやつもあるみたいだし、これでも少ない方だね。……幸いと言うべきか、町と町が近いし、訪れるトレーナーも他の地域に比べれば少ないからかな」

「ザグザグ！」

一匹のジグザグマがコウイチ達に向かつて鳴く。

「出すもん出したから、出すもん出せって感じか？」

「たぶんそうかな？ みんな、こんなに集めてくれてありがとう！」

「この綺麗な森を汚さないように、僕達も気を付けるよ」

「……ザグ？」

それを聞いたジグザグマは、なぜか首を傾げる。もしかしたら、彼らにとつてコレはただ興味があるから集めていただけで、ゴミとは思つていなかつたのかもしね。コウイチはそう感じた。まあ、だからと言つてポイ捨ては許すつもりはないんだが。

「じゃあ、お礼にこれを君達に……」

「「ザグー！」」

「うわあああ！」

待つてましたと言わんばかりに一斉にたかつて来たジグザグマ達が、野菜の入つたりユツクを取り上げてしまう。

「ちょ、ちょっとー!?」

「ザグザグザグザグザグ！」

「ザグ！ ザグ！」

「ザグザーグ！」

「……んんー？」

どうも様子がおかしい。リュックの中から野菜を取り出したジグザグマ達は、我先にリュックの中に入つていき、ポケットに頭を突つ込んでいるのだ。

コウイチはここで、改めて図鑑の内容を思い出す。
「もしかして、こいつら野菜よりリュックの方に興味津々だつたつてわけか……？」

「……ふふふ。なあ君。あれ見て、どう思うよ？」

「……そりやあもちろん」

「超かわいい！」

夢中になつてリュックで遊んでいるジグザグマ達と、そんな姿につられたチャモモが突撃するところを見ながら、コウイチ達はしばらく笑い合うのだつた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「じゃあまたなー！」

「チャモモー！」

「これからもよろしくねー！」

「「「ザググー！」」

ジグザグマ達に案内してもらつて本道に出たコウイチ達。見送る彼らに手を振つて、ゴミ袋を担ぎなおす。

「悪いね、君にも荷物があるのに持つてもらつちゃつて」

「いいんですよ、気にしないでください」

「チャモチャモ」

背負つたゴミは重いが、心は軽い。旅に出て何時間としないうちに良い物を見られたのだから、コウイチとしてはこれからの期待に胸が弾むばかりだ。

「助かるよ。コトキまではこのまま僕が案内しよう。向こうに着いたら、ちょっとしたお駄賃も渡せるんじゃないかな？」

「おっ、それは嬉しいですねー。楽しみにしますよ」

「ははは、あんまり期待はしないでくれよ？」

ジグザグマ達の話で盛り上がりながら、コトキタウンを目指す。コウイチ達の旅は、まだまだ始まつたばかりだ。

コトキタウン

ジグザグマ達と別れたコウイチ達がコトキタウンに到着したのは、ちょうど昼になつた頃だつた。

「はい、到着！ 二人ともお疲れさま。そして、ようこそコトキタウンへ！」

「……ここがコトキタウンかあ」

「チャモー」

町の入り口には看板が立つてゐる。

『ここはコトキタウン 何かが微かに始まるところ』

とても不思議なキャッチフレーズだ。町の魅力を語つてゐるわけではないが、旅を始めたばかりのコウイチにとつては、この言葉にどこか意味があるようにも思えてくる。

「とりあえず、フレンドリイショップにこのゴミを捨てに行こう」

「オッケーです」

「チャモー！」

オダマキ博士の特別授業では、旅で出たゴミは基本、フレンドリイショップの裏手のゴミ捨て場に捨てに行くといい、とのことだ。ゴミの量次第でポイントが貯まつてキズ薬を貰えたり、リユースできるモンスターボールを捨てたら新しいボールと交換して貰えたりと、ゴミ問題には積極的に取り組んでいるようだ。

男性の案内で、青い屋根のフレンドリイショップにたどり着く。裏手に回ると確かにゴミ捨て場があり、ゴミを一つの投入口へ流し込めばいいようだ。なんとここでは分別を機械が勝手にやつてくれるらしい。便利なものだ。ただ、生ゴミだけは別口だ。まあ旅をしているトレーナーは、食べカスのような生ゴミは土に埋めてしまえばいいので、あまり持つてこないが。

「じゃ、ここにジャーツと流し込んでやつて！ あるか知らないけど、生ゴミはあつちに捨てて！」

「うーっす」

スイッチを入れてゴミを投入してやると、ゴンゴンと機械が鳴りながら分別していく。

「……ポイントカードあるかつて聞いてますよー」

「僕は持つてるけど、今回は君のでやっていいよ。手伝ってくれたお駄賀代わりにね」

「いいんですか？」

「いいのいいの。ウチの青年団ではキズ薬とか、あんまり必要じゃないし」

「でも俺、カードなんか持つてないしな……あ、ここで発行できるじやん。やつとこ」

ポチポチと機械を操作して無事カードを入手。

「ショップに行けばボールがいくつか貰えるだろうし、たぶん薬も貰えるんじゃないかな？ 僕はこのまま報告に戻るつもりだけど、君はどうする？」

「俺はショップに行きますよ」

「じゃあここでお別れだね。今日はありがとうございます！」

「こちらこそ！ 縁があつたら、また会いましょう」

「チャモチャー！」

男性と別れたコウイチ達は、早速ショップに入る。

「おおー、なんかコンビニみたいだな。色々と置いてあるぞ」

「チャモく……」

「チャモモはこういうの、物珍しいのか？ まあいや、とりあえずポンント交換してもらおうぜ！」

「チャモ！」

店員に話しかけてカードを渡す。結果はいいキズ薬と毒消し1個に、モンスターボール5個。コウイチとしては思わぬ戦果にホクホク顔だ。

せっかくショップに来たのでついでに商品を見てみると、案の定色々と面白いものが見つかった。

「すごいキズ薬、タケー！ 元気のかけらもタケエー！ 欲しいけどなあ……しばらくはやめといた方がいいかあ」

「チャヤモモーチヤモー！ チヤモツ、チャモー！」

「どーした？ ……んー？ なんだこれ、お湯ですぐにできる鍋……
フリーズドライ食品？ 面白いな、一個買つていこうか！」

「チャヤモモーチヤモ♪ ……チャモツ？ チヤモモーチヤモー！」

「今度はなんだ？ ……取り寄せサービス、使い捨てタイプの技マシン『火炎放射』？ お値段……ゲエツ、たつけえ！ 買えるかこんな

ん！」

「チャヤモー？ (キラキラ)」

「うつ、可愛い……じゃねえ！ 『鳴き声』使つたつてダメなもんはダメ！ というかそもそも、まだ火炎放射なんて技覚えられるほどの実力ないだろ！」

「チャヤモオツ?! (がーん)」

聞いた話では、強力な技の技マシンがあつても、その技を覚えられるほどの下地がなければ無意味らしい。チャヤモモはまだまだ発展途上なので、『火炎放射』を覚えられるのは当分先の話だろう。

ちなみにコウイチが密かに狙っているのは『秘密のちから』という技の技マシンだ。この技は茂みや岩肌に『秘密基地』を作ることができるらしく、そこはちょっとした雨風なら凌ぐことができる宿になる。テントを張るような手間もかからないので、旅のトレーナー達には人気の技だ。

「火炎放射はまた今度な」

「……チャヤモモツ」

チャヤモモは残念そうにしているが仕方がない。めぼしい物を購入したらショットップを出ることにする。今はもうお昼時、そろそろ楽しみの一つだつた昼食を食べに行くとしよう。

「機嫌なおせよチャヤモモ。これから美味しいもん食いに行くぞー！」

「……チャヤモツ？ チヤモモーチヤモ！ チヤーモツ♪」

コトキの野菜をチャヤモモも楽しみにしていたらしい。一緒に鼻歌なんかを歌いながら向かうのはポケモンセンターだ。ポケモンセンターはポケモンの病院のような役割もあるが、宿泊施設の他、レストランや入浴施設があつたりと至れり尽くせりな場所だ。フレンド

リイショップと同じく、町で見つけたら一度は入つておいた方がいいだろう。

赤い屋根のポケモンセンターを見つけて中に入つてみると、ジグザグマとじやれ合っている少年がいたり、蝶々のようなポケモンを頭に乗せた女性のトレーナーがいたりと、人がいないわけではないようだ。レストランの方は昼時だからか、なかなか混雑している。

「お客様はお一人でよろしいでしょうか？」

「はい」

「チャモ！」

「それではこちらの席へどうぞ！」

店員に案内されて席に着き、メニューを見てみると確かに野菜ラーメンが置いてある。このレストランでは野菜類がオススメされるようだ。

「じゃあ早速野菜ラーメンを二つ……」

と思ったところで、ふとチャモモを見てみる。楽しみなのか目がキラキラしているが、果たしてコイツにラーメンを食べさせていいのだろうか？

「お前、クチバシだしなあ……鳥にラーメンはすすれないよなあ……」

「チャモ？」

「チャモモにはどつちかというと、この野菜炒めが良いだろ」

「チャモ？ ……チャモ！ チャモチャーモ！」

同意を得られたようなので、野菜ラーメンと野菜炒めを注文する。程なく運ばれて来た二つの品には、これでもかと言わんばかりに野菜が盛り付けられていた。非常にボリューミーな料理である。

「じゃあ、いただきまーす！」

「チャモモチャーモ♪」

野菜の山に箸を突っ込み、まずは一口。

「（うーん、シャキシャキしつつも塩スープでシットリと柔らかくなつた良い野菜だ。味もいいんだけど、俺こういう触感も好きなんだよなー）」

「チャモツ、チャモツ（ぱくぱくぱくー）」

「おお？ すげえ食いつくり。お前も気に入つたみたいだな？」

「チャモ！ チヤモモー、チヤモチヤモチヤー！」

「うんうん……サツパリわかんねえ！」

「チヤモツ!? チヤモモ……チヤモオツ（ニヤツ）」

「いやー、しかしこれは旨いな「チヤモオツ！」ああー!? てめつ、コラツ！」

いきなりテーブルに飛び乗ったチヤモモが、猛然とコウイチのラーメンに顔を突っ込んだ！ 慌てるコウイチを尻目に、顔を抜き出したチヤモモは咥えた麺をチャルルツと吸い上げる。

「なに勝手に食つてんだお前は！ というかどうやつて食つてんだよ！ ラーメン食えんのかよ！」

「チヤモチヤモチヤモ！（ケラケラケラ）」

「……おりやスキありい！（バクツ）」

「アチャーーーツ!?

野菜炒めを食べられたチヤモモは悲痛な声をあげた。

「野菜炒めもイケるな！ わはははは！」

「チヤモ！ チヤモ！（パンパン）

「お客様。他のお客様のご迷惑となりますので、店内での大騒ぎはご遠慮ください」

「……はい」

「……チヤモ」

店員の営業スマイルはとても怖かつた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「さーて腹（）しらえもしたし、どーしようか」

「チヤモ?」

何のこと? と言いたげなチヤモモに説明する……前に、聞いている人が周りにいないか確認して。

「言っちゃ悪いんだけど……この町、マジでなんにもないだろ？ 今日この町に泊まつて明日出発するのもアリなんだけど……これ、見て

みろよ

「チャモモ?」

ポケモンセンターで貰つておいたホウエン地方のガイドブックを開き、次の町であるトウカシティのページを見せる。

「この町、『トウカジム』っていうポケモンジムがあるんだよ！ 早く行つてみたくないか？」

「チャモ!? チヤモツ、チャモー！」

色々な町にあるポケモンジムにはジムリーダーと呼ばれる強いポケモントレーナーがいて、腕試しにバトルを挑むことができる。彼らを倒すとジムバッジを貰え、8個集めればポケモンリーグに挑戦できるようになるらしい。コウイチとしては、ぜひともこのジムバッジを集めたいところだ。

「どうか、お前ポケモンジムつて知つてるんだっけ？」

「チャモチャモ（ウンウン）」

「それなら話は早いな。今出発すれば明るいうちにトウカシティに着くから、ジムを覗く時間もあると思うんだけど……どうよ？」

「チャモー…………チャモツ！ チヤモチャモー！」

「それは…………どつち？ 行つちやう？」

「チャモ！」

「よし、じゃあそと決まれば出発だ！ 目指せトウカジム！」

「チャモー！」

「急ぎ旅ではないけど、急ぐ急がないは自由だよな！ なんて考えながら、早くもコトキタウンを出ることにしたコウイチ達。102番道路に通じる出口にやつて来たのだが、そこで一人の男に呼び止められる。

「ちよ、ちよつと待つて君達！ そこでストップ！ ストップ！」

「はえ？」

「チャモ?」

声をかけてきたのは、道の端に座り込んでスケツチブツクに何かを描いていた男だ。

「…………え？ 何か用ですか？」

「チャヤモモ？」

「うん、ちょっとそのままバツクして、バツク」

「……？」

「そうそう、ありがとうね。悪いんだけど、少しの間、そこの道を通りでもらいたいんだ」

「はい？ なんかあるんですか？」

「もちろん！ そこの地面見てみなよ！」

「……これは？」

男が指さす所を見てみると、どうやら地面には足跡がついているみたいだ。

「足跡？」

「そう！ しかもこの辺りじや見かけない、珍しいポケモンの足跡を発見したんだ！ だからスケッチが終わるまで待つてくれよ」

「へー、珍しいポケモンの足跡かあ」

「チャヤモモ？」

珍しいポケモンの、と言われるとコウイチも気になってくる。じーっとその足跡を観察してみると、どうも人が履く靴の足跡に似ているようだ。

「なんか靴みたいな足跡ですねー」

「チャヤーモ」

「…………えつ、靴？」

それを聞いた男は、足跡とスケッチした絵をよく見てみる。

「…………」

胡坐をかいて自分の靴の裏を見てみる。

「…………よく見たら自分の足跡だつたよ」

「おい」

「チャヤモ」

単なる人騒がせな奴だった。

「うう、まさかこんな勘違いをするなんて……」

「あー、まあ、ミスは誰にでもあることですよ」

「チャヤモモー、チャヤモチャヤモ」

「ありがとうね……」

「うーん……あ、そうだ。他に足跡のスケッチはあるんですか?」

「うん? まあこちらのポケモンの足跡なら、ここにスケッチしてますよ」

「良かつたら見せてくださいよ」

「構わないよ。ほら」

渡されたスケッチブックをパラパラとめくつてみると、確かに何枚もの足跡の絵が描かれている。

「……おっ。チャモモ、これジグザグマの足跡だぞ。ちゃんとジグザグに歩いてる」

「チャモモー?」

「こつちは……『タネボ』?」

「102番道路に生息しているポケモンだよ」

「ふーん……ん? 『ケムツソ』ってポケモンは這いずったような跡なんだな」

「ケムツソは足が短くて、胴体が地面にくつついちやうからねえ。えーと……ほら、あそこの木にくつついてるポケモンだよ」

見ると、幼虫のような赤いポケモンが木の枝にくつついて、葉っぱをもしゃもしゃと食べている。カワイイようなカワイクナイような……いや、ポケモン補正でカワイイということにしておこう。新しいポケモンなので、ポケモン図鑑で調べてみることにする。

『ケムツソ。いもむしポケモン。木の枝にくつついて葉っぱを食べている。口から出す糸は空氣にふれるとネバネバになり、相手の動きを封じてしまう。鳥ポケモンに襲われた時はお尻の毒のトゲで必死に抵抗するぞ』

「毒あんのか、結構危ないヤツだな」

「どうどう? 足跡、結構面白いでしょ」

「うーん、確かに。やっぱポケモンの個性出でますね」

「そなんだよね。しかも凄い人だと、足跡からポケモンの気持ちがわかつちゃうんだよ!」

「えつ、それは凄すぎる」

「チャヤモー！」

「凄いよねー。聞いた話では、『足跡博士』がシンオウ地方にいるらしい、一度会つてみたいもんだよ」

「……ちなみにあなたは、足跡からどれくらいわかるんですか？」

「……ふふん、試してみるかい？ ジャあきみのポケモンでやってみようか」

「よーし、チャヤモモ！ ちょっとそこ歩いてみてくれ！」

「チャヤモツツ！」

そう言われたチャヤモモは、どこか気取った様子でチョコチョコと歩いてみせる。できた足跡をしばらく観察した男は、

「うーーん……この堂々としつつも軽妙洒脱な足運び。間違いない、この子は！」

「おおつ？」

「チャヤモツツ？」

「…………男の子だ！」

「…………」

まあ、間違つてはいないが。というか、本当にわかつたのなら確かに凄いことだが。しかし……

「…………」

「な、なんだよその『ちよつとガツカリ』って感じの目は。仕方ないだろ！ 足跡博士並の人はほんの一握りなんだからな!?」

「……いや、性別わかるだけでも十分凄いですよ？ ホントに」

「チャヤモー…………」

「くっそー！ 僕だつてもつと勉強して、足跡博士みたいに何でもわかるようになつてやるからなー！」

そう言つて走り去つていく男。彼が将来どうなるかは……きっと足跡博士でもわからないのだろうと、コウイチ達は思うのであつた。

102番道路

早くもコトキタウンを出発したコウイチ達。今いる102番道路は101番道路と同じく、比較的短い街道なので、順調にいけばトウカシティには明るいうちに到着できる……らしい。急ぐ旅ではなかつたのだが、トウカジムが気になり過ぎて、たつた一日で二つ目の町まで行くという強行軍となってしまったのだつた。

「オダマキ博士、トウカジムのジムリーダーと知り合いだつて言つてたなー」

「チャモモチャモ」

「ノーマルタイプのジムとしか教えてくれなかつたけど、どんなジムなんだろうな?」

「チャモツ。チャモチャード」

「楽しみだなー」

「チャモー。…………チャモ?」

そんな話をしながら歩いていると、チャモモが突然立ち止まつた。

「どうしたチャモモ?」

「チャモモチャモツ! チャーム、チャー」

「……なんか見つけたか?」

「チャモ!」

チャモモがそう鳴いて、道端の木に近づいて行くのを見たところで、コウイチもソレに気が付いた。木の実がたくさん生つている。しかも、どんぐりの様な見た目の……人の頭よりもでかいヤツがだ。あまりのサイズに不安すら覚える。

「な、何だこれ。ちょっと大き過ぎるだろ!?

「チャモモチャモ」

「これ食えるのかな? スイカ並のサイズのどんぐりつて……うーん

?」

「チャモモチャー!」

「……とりあえず採れつてか?」

「チャヤモ」

「そーだな、まずは収穫してみつか」

枝にぶら下がった実のうちの一つを下から支えてみると、中身が詰まっているのかズツシリと重たい。どんぐりを食べるならすり潰して粉にするのが良いとコウイチは聞いたことがあるが、この大きさのどんぐりだと粉末にするのも一苦労だ。粉にしたらどうしようか。パン、クッキー……どんぐりコーヒーなんてものもあつた気がする。作るのは大変そうだが、夢は広がるばかりだ。

実を掴んで捻る様にして引っ張つてやると、思いの外簡単に枝から離れた。

「ほら、見ろよチャヤモモ。この木の実、お前ぐらいでかいぞ」

「チャヤモー♪」

「じゃあ一個持つて行くとすつか……ん？ なんだこの……模様？ みたいなの」

「チャヤモ？」

木の実を180度回転させてやると、変な模様を見つけた。この実の特徴かとコウイチが思つた時だ。なんとその模様が開き、出てきた目の様なものがコウイチの視線とがち合つたのだ。

「うおわあっ!!」

「チャヤツ?!」

思わずコウイチは木の実を放り投げた。

「なんだあ!? ま、まさかコレ、ポケモンか!？」

「チャヤモ!? チャヤモチャヤモー！」

「…………」

放り投げられた木の実の様なポケモンは立つのに苦労しているのか、コロコロと転がつている。コウイチがポケモン図鑑を向けてみると。

『タネボー。どんぐりポケモン。木の枝にぶら下がつて栄養と水分を吸収している。木の実そつくりで、近づいて来たポケモンを驚かせて喜ぶ。一日一回身体を葉っぱで磨いているようだ』

「本当にどんぐりポケモンなのか。一応凶暴な感じではないのかな。

……あ、突然投げちやつてゴメン。今立たせるよ」

「…………ネー」

「声かわいいなオイ」

なんとも言えない容姿のポケモンだが、かわいい声で鳴いて見上げられると、コウイチとしては良評価を下さざるを得ない。

「チャモモチャモ？」

「ネー、ネー」

「チャモモチャ、チャモーッ」

「ネー♪」

「なんか話してる……うーん、和むなあ」

しかし、ふと気が付く。そういえば、さつき木には大量の木の実が生っていたんだつた。これがポケモンだつたということは……風の音なのか、どこからか聞こえてくるヒューヒューという音が、妙に不安を搔き立てる。おそるおそる振り向いて……コウイチはゾツとした。木にぶら下がつた全てのタネボーグ、こちらをじつと見ていたのである。心臓が止まりそうなほどビビつた。

「おいチャモモ、チャモモ……！　あれ、あれえ……！」

「チャヤ？……チャモツ?!」

さしものチャモモも、この光景には驚いた様だ。

「は、ははは……ごつ、ごめんな邪魔して。俺達はもう行くからサ……」

「チャモ、チャモオ……」

「じゃあ、ごゆつくり……」

闘う闘わないを抜きにしても、流石にこの数相手だと不安しかないので、とにかくこの場を離れることにしたコウイチ達。足早に去ろうとしたそんな彼らの背中から。

「〔〔（ボトボトボトボトツ）〕〕

「ヒツ……」

「チャツ……」

大量の何かが地面に落ちた音が、背後から聞こえてきた。歩くスピードは、更にアップ。

「「(コロコロコロコロコロ……)」」

続いて聞こえてきた、何かが転がる音に、思わずコウイチ達は振り返つてしまつた。

「「ネーネーネー♪」」

「ひええええ!」

「チャモモモモ!」

たくさんの中のタネボーや達が、転がりながら追いかけて来ていた!

「はつ、走れチャモモー!」

「チャモーッ!」

「「ネー♪」」

——コノハハハ!

先程から聞こえてくるヒューヒューという音色の中に誰かの笑い声が混じっていたことに、コウイチ達は気付かなかつた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「はあ、はあ……」

「チャモオ……」

タネボーや達から逃げ出したコウイチ達は、どこかで道を間違えたのか、森の中の道無き道を進んでいた。完全に迷つてゐるのだが、何故かその自覚がなく、憔悴した様子でただただ歩いてゐる。

「逃げなきや、逃げなきや……」

「チャモ、チャモ……」

「逃げ……あ」

注意が散漫になつてゐたコウイチは、地中から出ていた太い木の根に足を引っかけ、転んでしまう。

「いつ……てえくく!!」

「チャモッ!?」

「ベタンといつたぞチクショウ! 血い出てないよな……つて、あれ? ここどこだ?」

どうやら痛みで正気に戻つたらしい。チャモモモコウイチの声で

我に返つたようで、周りをきよろきよろと見回している。

「……、どう見ても街道じゃないぞ……やつべえいつの間にか道に迷つてる！」

「チャモ?! チヤモツ、チャモチャ——!?’

「まつ、待て待てまずは落ち着け！ オダマキ博士も言つてたろ！ 迷子になつたらまずは冷静になることが大事だつて」

「チャ、チャモ——……」

「いいか、とりあえず深呼吸だ」

「チャモ」

「((スウ——ハア——))」

「……ふう、今日も良い天気だな！」

「チャモ——！ (ゲシツ)」

「いてつ、蹴るなよ！ ちよつとした冗談だろ！」

「チャモチャモ！」

チャモモをからかつて冷静になれたところで、コウイチはポケモン図鑑とコンパスを取り出す。

「ポケモン図鑑なら、大雑把な現在地がわかるはず……ん、一応トウカ側に近づいてるな。コンパスはこつちが西か。よし、こつちだチャモモ！」

「チャモツ」

ひとまず何とかなりそつだが、気になるのはどうしてこんな所に来てしまつたかだ。いくらなんでも、気付かないうちにこんな森の中に入り込んでしまうほど無我夢中になつた覚えはないのだが。どうも何かおかしい氣がする。

しばらく歩いていると、森の中にひらけた場所があり、いくつもハスの葉っぱが浮いた大きな泉が湧いているのを見つけた。

「おおつ？ なんだこ。すげえ綺麗な場所だな！」
「チャモツ！」

木々に覆われて薄暗い中、木漏れ日が澄んだ泉の水に差し込んでキラキラ光つている光景は、とても神秘的だ。人の手がまったく入つていないので、尚更そう感じる。

「チャヤモチャヤーモ！」

「……休憩していくか。なんか疲れたしな」

コウイチ達は泉の傍に行き、水中を覗き込んでみる。浅い所なら水底が見えるくらい綺麗な水だ。念のため水質検査用のキットを使ってみたが、十分飲み水に適していた。

「よし、大丈夫そだから飲んでいいぞ」

「アチャヤ！」

「じゃあ俺も…………はあ、生き返るな！」

「チャヤモー♪」

冷たくておいしい水を飲み、水辺に座り込むと、ようやく人心地が付けた。さつきまではどうなることかと思っていたが、チャヤモモが水を蹴つて遊んでいるのを見ていると、どうにでもなりそうな気がしてくる。

「チャヤモモー。お前炎タイプなんだから、水遊びは程々にしろよー」「チャヤーモー」

どうやらチャヤモモも元気を取り戻したようで、良かつた良かつた。せつかくなので、コウイチもチャヤモモと一緒に遊ぶことにする。

「ここに飛び込んで、思いつきり泳げたら気持ちいいだろうなー……」「チャヤー？」

「お前はやつちやダメだけどな？」

「チャヤモ……」

「ははは、しゃーないしゃーない。お、ハスの葉が流れて来てる。……

そーいやどうしてこう見事に浮くもんなのかな」

なんとなく気になつたコウイチが、ハスの葉っぱに手を伸ばした時。

「(チャヤブ) ……」

「…………（またこのパターンかよお）」

葉が水面から少しだけ持ち上がり、真下から現れた小さな目と視線が合つてしまつた。

「…………チャヤモモ、こっち来い。この葉っぱもポケモンだつたわ」「チャヤモオ～……」

「(またそのパターンかつて顔してんな、コイツも)」

いやまあ、知らないポケモンと出会えるのは歓迎するところだが。頭にハスの葉をのつけているらしいそのポケモンは、何処と無くマヌケな感じの丸い目で、コウイチ達をじつと見つめている。

「…………」

「…………アチャヤ?」

「…………ハボー」

鳴き声もちよつとマヌケな感じだ。やがてのつそりと岸に上がつて来たポケモンに、コウイチは無言でポケモン図鑑を向ける。

『ハスボー。うきくさポケモン。綺麗な池や湖に浮いて暮らす。頭の草が枯れると弱つてしまふが、陸地を移動して棲み家を探すこともあります。たまに小さなポケモンを草に乗せて運んであげている姿が目撃されている』

「…………ハボ」

「へー、面白いポケモン」

「チャモモチャモチャーモ?」

「ハボ? ……ハボー」

二匹で何の話をしているんだろうか。コウイチが試しにクチバシみたいな口の下を撫でてやると、気持ち良さげに目を細めている。

「…………よく見たらお前、虫ポケモンでもないのに六本足なのか。変な感じだなあ」

「…………ハボー?」

「ん、なんでもないよ」

抱き上げてやると、短い足を空中でちよこちよこと動かしている。カワイイ。水棲ポケモンなだけはあつて、肌に若干ぬめりけがあるみたいだ。

「お前達はこの泉に住んでるのか? 突然お邪魔しちゃってごめんな」

「ハボ」

気にするな、と言つてくれているような感じだ。水面からこちらを

覗いているハスボーラー達も、特に何かするわけでもなく、ボンヤリとした目でコウイチ達を見ている。

「ありがとう。ちょっとの間、ここで休ませてもらうな」

「ハボ」

「ハーボ」

「ハボー」

ハスボーラー達は歓迎してくれているのか、口々に鳴いている。どうやら危ないことにはならなさそうだ。

抱いていたハスボーラーを下ろしてやると、オレンの実をのせた葉っぱが、スース、とコウイチ達の方へ流れて来た。

「……もしかして、俺達にくれるのか？」

「チャモ?」

「「…………」「」

「…………え? どうなの?」

ハスボーラー達は何故か返事をせず、オレンの実と葉っぱをじっと見つめている。

「えーと…………とりあえず、取るぞ…………?」

差し出されたオレンの実をコウイチが取ろうとした瞬間!

「ハロロオオオ!!」

「ぎやああああ?!」

「チャアアアアア?!」

葉っぱの下からカツパの様なポケモンが勢い良く飛び出してきた

! コウイチ達は悲鳴を上げて尻餅をつく。その姿を見て、ポケモンは大笑いしていた。

「ハロハロハロ! (ケラケラ)」

「なつ、なんだあコイツは?!」

ポケモン図鑑を向けてみると。

『ハスブレロ。ようきポケモン。ハスボーラーの進化形。身体中ヌルヌルした粘液で覆われている。夕暮れ時に活動する夜行性で、川の中からひよっこり現れては人を驚かせて遊んでいる。川底の石についた水苔を食べているようだ』

「ハスブレロか！ どうやらハスボーとは違つてイタズラ者のポケモンみたいだな。今のはもしかして、『驚かす』つて技か？」

「コーカハハ！」

「今度はなんだあ!?」

森の中から蔓に掴まつた茶色い影が、高笑いをしながら飛び出して来た！ その影は空中を軽やかに舞いながら、ハスブレロの隣に着地して互いにハイタッチする。

「コノハー！」

「ハロー！」

「コノコノコーノ♪」

「知らないポケモンがまた増えたぞ……」

「チャモモ？」

『コノハナ。いじわるポケモン。タネボーの進化形。木登りが得意な森に住むポケモン。コノハナが奏でる草笛の音色は人を不安にさせる。尖つた長い鼻を握られると体の力が抜けてしまう』

「コイツもイタズラ者みたいだな……ハスブレロと肩組んで仲良さげだし、気が合つてるのかも。……いや待てよ、不安にさせる草笛？」
そういえば、さつき森の中で変な音を聞いていたような気がする。その音のせいで、だんだん思考力が落ちていったような……

「……チャモモ、お前も森の中で草笛の音を聞かなかつたか?!」

「……チャモ!! チャモチャモー!!」

「やつぱりか。おいコノハナ！ まさかお前が俺達をこんな所に誘導したのか?!」

「コノハハーッ♪

「……どうやらそうみたいだな。得意げにしやがつて……ん？」

背後の木の陰からガサガサと物音が。振り向いてみると、今度はタネボー達がぞろぞろと歩いて来ていた。コウイチ達の位置からすると、挟み撃ちにされる形である。

「……ま、まさか！ これはアレか、『本当は怖い草ポケモン』的なやつ！ 獲物を殺して養分にするつて展開!？」

「チャツ、チャモ～～～～ツ?!」

ハスブレロとハスボーは水・草タイプなので、チャモモの苦手な水タイプの技を使えるに違いない。タネボーとコノハナは相性的には有利だが、それでも数が多過ぎる。絶体絶命だ。

「「ネーネーネーボ」」

「どうする、どうする……!?」

「チャモチャモ～!?」

あわや、俺達の冒険はここまでか、と思った時だ。たまたまなのかわざとなのか、タネボー達が次々とすっ転び始めた！

「「ネーボ」」

「……ええ？」

「……アチャヤ？」

どこぞの童謡を思い出させるような勢いで、タネボー達がころころと転がっていく。コウイチ達はスルーして、そのまま泉の中へポチャンポチャン。果然とそれを見ていると、ハスボー達がタネボー達を頭にのせて浮かんできた。

「……ハボボ」

「ネーボ」

どちらも楽しそうにしている。どうやら危険はなさそうだ。

「……はあ、寿命が縮んだ気がする」

「……チャモチャヤ」

タネボーとハスボーは放つておくとしよう。平和なポケモンみたいだし。

なんだかどつと疲れてしまつた。あの問題はコノハナとハスブル口だが……

「……じゃあ俺達もう行くから。お前らもイタズラはほどほどにしろよ」

「コノコノ？」

「ハロ？」

コノハナとハスブレロは顔を見合させて。

「(ベロベロバー!)」

「いらっしゃ☆」

コウイチの怒りのボルテージが上がっていく！

「ほほーう、 そうくるかイタズラポケモンども。 それならちよつとお仕置きしなくちゃいけないなあ……」

「チヤ、 チヤモ……？ チヤモチヤモ……？」

「チヤモモ！」

「アチャヤ?!」

「あいつらにお灸を据えてやるぞ！ ポケモンバトルだ！」

「チャツ、 チヤモ！」

「コノコノ～？」

「ハロハロハロツ！」

コノハナとハスブレロは乗り気のようだ。 腕や首を回して準備運動しながら前に出てくる。 ……二匹一緒に。

「（やべ、 流石に一対二はキツいわ……）」

バトルを挑んでおきながら、 情け無いにも程があつた。

「（と、 とりあえず交渉して……いや、 すぐカツコ悪いぞソレ。 今更一対一してくれって言うのは。 仕方ない、 ここは……）」

コウイチはできるだけ好戦的な笑みを浮かべて（できているかどうかは別問題）、 コノハナとハスブレロに言い放つ。

「お、 おお？ なんだ、 二人掛かりじゃないと勝つ自信がないみたいだな。 お前らはどつちも十分強いと思つてたけど、 二対一じやないと戦えないなんて……はあー、 がっかり」

「コツ、 コノコノーツ!？」

「ハロハロオツ！ ハロツ、 ハーロツ！」

コノハナとハスブレロは、 地団駄を踏んで怒つてているようだ。 コウイチの挑発が効いているらしい。

「コノツ！ コノハーツ！ コノハハツ!？」

「ハロツ！ ハローツ！ ハロハロハロ!？」

「（わかるように喋つてくれ……）」

コノハナとハスブレロは、 互いに怒鳴り合う様に話した後、 コウイチの方に話しかけてきた。 息を荒くして返事を待つてゐる所を見る

に、もしかして今質問をされたのだろうか。だったら今の話の内容は、

『俺があいつと戦う!』

『いや俺だ!』

『俺だ!』

『俺!』

『『あんたはどつちと勝負したい!?』』

といつた感じか? コウイチとしては、相性で有利なコノハナを先に倒して、相性が不利なハスブレロに余裕を持つて挑みたいところだ。この男、打算のカタマリである。

「じゃあ、まずはコノハナとバトルするぞ」

「コノツ!」

「ハロツ?!」
コノハナ、思わずガツツポーズ。ハスブレロはそれを悔しげに見つめていた。

「よーし、チャモモ。これでタイマンになつたぞ! あとはコイツらに勝つだけだ!」

「チャモ。チャモ……」

「(……うん?)」

さつきまでのやる気がある表情とは打って変わつて、今のチャモモは……なんだか複雑な表情をしていた。これまで何度か見てきた、呆れの表情ではない。どこか安心したような、だけど寂しそうな……何かを言いたいけれど、何も言えないような。そんな表情。コウイチが今のチャモモの気持ちを読み取るには、色々なものがまだ、足りない。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「開始の合図は、この石ころが地面に落ちた瞬間だ。いいな?」

「アチャ」

「コノツ」

コウイチ、チャモモのコンビとコノハナが向かい合う。周りのポケ

モン達も興味があるのか、ハスブレロだけではなくタネボーとハスボー達も彼らのバトルを見つめていた。

「じゃあ……いざつ」

コウイチが放り投げた石ころが地面に……落ちた！

「コノーッ！」

「チャモモ、『鳴き声』だ！」

「チャモモ♪」

「コノハツ!?」

動き出そうとしたコノハナに先んじて、チャモモが可愛らしく鳴いてみせた。コノハナはその様子に尻込みしているみたいだが、それでも気を取り直して攻撃に移る。頭の葉っぱをブンブンと振ると、そこから葉っぱが次々と飛んできた！

「コノッ、コノッ、コノーッ！」

「（これは『葉っぱカツター』だな!?）チャモモ、『火の粉』で撃ち落としちまえ！」

「チャツ、モー！」

チャモモが放った『火の粉』は相殺の形で『葉っぱカツター』を弾いてみせたが、コウイチとしてはタイプの相性的に押し切りたかったところだ。これでも『鳴き声』の効果で威力は落ちているはずなので、やはり相手は格上だったということだろうか。

「もう一度『火の粉』だ！」

「チャモモツ」

「コノコノーッ」

「チャモチャモー！（ぶんぶん）」

「うつ、コイツ結構すばしつこいぞ……」

『火の粉』をひよいひよいと避けられて、チャモモは憤慨しているみたいだ。森に住んでいるだけあって、コノハナはかなり身軽だ。

「コー……ノッ！」

「アチャツ!? チャモツ！」

飛んでくる『葉っぱカツター』を危ういところで回避する。

（なんとかスキをみつけて『火の粉』を叩き込めたら……あつ、そう

いえば！）チャモモ、接近戦だ！　お前のフットワークを見せてやれ！』

「チャモツ！」

「コノツ？　コノハハーツ！」

迎え撃つコノハナが、チャモモを『はたき』落とそうと腕を振り上げる。

「チャモモ！　『ひつかく』で腕を弾いて、鼻を引っ掴んでやれ！」

「アチャツ!!」

「コツ？」

振り下ろされた腕を、チャモモは踵落としの様な蹴りで見事に弾いてみせた。その勢いを利用して更に一回転し、コノハナの長い鼻をガシツと掴む！

「コノヽヽヽヽヽツツツ!!」

「うげつ、あれ絶対いてえヤツだ……！」

ポケモン図鑑によると、コノハナは鼻を握られると弱いらしい。それでスキを作ろうと思つたのだが……考えてみたら、チャモモの筋張つた足で鼻を掴まられたら誰だつて痛いと思う。指示しておいてなんだが、コノハナには悪いことをした。

コノハナは必死に頭を振つて引き剥がそうとしているが、その分チャモモも必死にしがみついているので、ますます痛々しいことになつてている。

「チャ、チャモモ！　今だ、思いつきり『火の粉』を喰らわせてやれ！」

「チャツ、チャー……モーツ!!」

「ハヽヽヽヽツツ!!」

ガードする余裕もなかつたコノハナに、至近距離からのチャモモの『火の粉』が炸裂した。効果は抜群だ。コノハナが大きく吹つ飛んだためにチャモモは足を離してしまつたが、相当なダメージを与えられただろう。

「コ、コノオ……！」

「今のは効いたはずなのに、あいつまだ動けるのか！」

「チャモ！　チャモーツ！」

「コノツ……コノハーツ!!」

「!」

どうやらかなりのダメージを受けて、コノハナは完全に怒ったようだ。そのまま攻撃に移るかと思いきや、コノハナは腕を広げて目をつぶり、まるで光を浴びるようなポーズをとった。

「(なんだなんだ、『光合成』? まさか『ソーラービーム』!?)」

しかもなんだかコノハナの身体が一回りくらい大きくなっているような。何をしているのかはわからない。わからないが、とりあえず……!

「チャヤモモ、もう一発『火の粉』だあ!」

「チャツ、モー!!」

「コペペペペッ?!」

まあ、スキも作らず棒立ちしてたらいい的でしかない。

「ハ～～～～～」

「目を回してる……勝つたみたいだぞ、チャヤモモ!」

「チャヤモーツ♪」

「ふう……しかし今のはなんだつたんだろうな」

コノハナが使つた技は『成長』という、自分のパワーを上げる草ボケモンの技だつたのだが……今回はコウイチも気付かないままだつた。

「ハロハロツ」

「コノ～～～」

「ハロツ! ハー口、ハロハロー!」

「コノコノ……コノ、コノ……ハ……」

「ハローツ?!」

「(こう言うのもなんだけど、なんか茶番感がする……)」

バトルを見守っていたハスブレロが、コノハナを助け起こそうと手を差し伸べるが、その手を弱々しく握りしめたコノハナは何かを伝えた後、くたりと倒れてしまった。慟哭するハスブレロ。一応死んでないからな? そいつ、今チラチラこつちを窺つてるからな?

「ハロ……!」

「（そんな、『仇を取つてやる』つて顔されても……）」

「チャモチャモ……」

「何不安そうな顔してんだ……あいつ普通に生きてるぞ。横目でめつちやこつち見てるぞ」

「チャモツ?!」

「ハロツ?!」

「お前も驚くんかい」

ハスブレロがコノハナの所へ走り出す。コノハナは慌てて目をつぶつて死んだフリを続けるが、何もせずにじーっと見つめるハスブレロに焦れたのか、薄目を開けて様子を窺おうとして……当然そこでバレた。

「…………（ゲシツ）」

「コツ?!」

ハスブレロは無言で立ち上がり、横になつているコノハナに一発蹴りを入れてから、またコウイチ達の方へ戻つて来た。後ろではコノハナが起き上がりつて抗議の声を上げている。

「ハロハロ」

さつさと始めよう、と言つてゐる氣がする。

「あー……チャモモ、連戦だけどいけるか？」

「チャモ！」

「オッケー、じやあ勝負だ！」

「アチャーッ！」

「ハロツ」

ハスブレロが落ちていた石ころを拾い上げて、放り投げる。そして石ころが地面に落ちた瞬間。

「チャモモ、『火の粉』！」

「チャーッ!!」

「ハロローッ!!」

まずは小手調べとばかりに、チャモモの『火の粉』とハスブレロがブクブクと吹き出した『泡』攻撃が激突した！ 相性で圧倒されるかと思ひきや、『火の粉』でも泡ぶく程度なら割つてしまえたので、どう

やら威力を弱めるくらいは期待できるみたいだ。

「ハロハロハローッ！」

「むつ？ なんだ？」

「チヤ？」

大きく息を吸い込んだハスブレロが、今度は頭を振り回しながら『泡』を吹き出し始めた。大量の泡ぶくは空中を漂い、あつという間にコウイチ達の視界を妨げる。

「やつ、やべえ！ ハスブレロを見失つちまう！ チヤモモ、お前も『火の粉』を撃ちまくつて泡を壊すんだ！」

「チヤ！ チヤツモー！」

ハスブレロの真似をして、チヤモモも頭を振りながら火を噴いていくが、泡に紛れて近づいて来た青い影には気付けなかつた。

「チヤモモ、左だーつ！」

「アチヤ?!」

「ハロロオツ!!

「チヤモモツ?!」

「まずい、チヤモモ?!」

ハスブレロの『驚かす』でひるんでしまい、尻餅をついたチヤモモに追撃の『泡』攻撃が放たれた。チヤモモには回避する間もない。直撃だ。

「そんな、チヤモモツ?!」

「ハロハロモツ♪」

水タイプの技を食らつてはひとたまりもない。そう思つて倒れたチヤモモに駆け寄ろうとしたコウイチは、その小さな体から白い煙が立ち昇つていてことに気が付く。耳をすませば、シューーシューという音も聞こえてきた。

「白い煙……いや、もしかして蒸氣かこれ!？」

よろめきながらも、瞳を闘志で燃やしながら、チヤモモが立ち上がる。今は普段以上の高熱を放っているのか、濡れた体が見る見るうちに乾いていった。

「(凄い勢いで水分が蒸発しちまつた！ たぶん今のチヤモモの体は

よつほど熱いんだろうけど、いつもはそんな体温じゃ……いや、もし
かして！」

コウイチはチャモモの『特性』を思い出す。

『猛火』！ 逆境でこそ強くなる特性!!」

「チャモオオオツ!!」

「ハロツ?！」

チャモモの凄まじい気迫に、今度はハスブレロがひるむことにな
る。

「いけ、チャモモ！ 『火の粉』だ！」

「チャーツ!!」

「ハ、ハロローツ！」

再びぶつかり合う火と泡だが、今度の『火の粉』は火力が違った。ハ
スブレロの技に完全に押し勝ち、そのまま命中させたのだ。これには
ハスブレロも慌てたのか、またしても空中に『泡』を放つて隠れよう
とするが。

「そんな暇は与えねえ！ チャモモ、『火の粉』だ！ 撃て撃て撃
てーつ！」

「チャーツ！ チャーツ！ チヤツモーツ!!」

「ハ～～～～ツ??」

ハスブレロ自体は水・草タイプなので、炎タイプの技はしつかり通
る。加えて今のチャモモがお見舞いする連続攻撃の直撃だ。それこ
そひとたまりもない。遠くから見ていたコノハナの所までうまい具
合にぶつ飛んだハスブレロには、もう闘う体力は残っていなかつた。
「コノ!? コノハーツ?」

「ハ……ハロオ……」

互いにボロボロになつて氣遣い合う二匹だったが、気が付けば目の
前にはそれをした恐ろしいポケモンと、そのトレーナーが。

「コ、コノハ～～～～（ガタガタ）」

「ハロ～～～～（フルフル）」

「……はあ」

「（ビクツ!）」

身を寄せ合つて震える二四。コウイチがついたため息に、より大きな身震いを一つしたが……次いで徐に下ろされたバツクパツクからキズ薬を取り出したのを見て、目を丸くした。

「……悪かつたよ、ちょっと俺も熱くなりすぎてた。今手当してやるからな」

「チャーモ、チャモ、チャモ」

「コノ……？」

「ハロ……？」

「でもお前らも、これに懲りたらあんまり人に迷惑かけんなよ？」

「……コノ。コノハハ！」

「ハロハーロ。ハロハロ」

頷くコノハナとハスブレロ。

「それならよし。チャモモも頑張ったな！ 最後の技もすげー威力だつたぞ！」

「チャモツ！ チャモチャモー！」

「よしよ……アツツ！ めちゃ熱いなお前！」

「チャ？ チヤモチャー♪（ケラケラ）」

「笑つてんじやねえやい。ほら、これ食つて体力戻せ」

「！ チヤモーツ♪

好物のオレンの実をチャモモに渡すと、むしゃむしゃと喜んで食べた。かなりダメージを受けたはずだが、思つたよりはまだまだ元気そうなので、コウイチも安心だ。

「……よつしや、手当完了！ お前らどうだ、立てそうか？」

「コノー」

「ハロハロ」

「大丈夫みたいだな、良かつた良かつた。さて……だいぶ時間が経つちゃつたな。チャモモ、どーしようか。トウカシティまでどのくらいあるかわからんないし、今日はこの辺で野宿するか？」

「チャモ～……」

「夜の森は歩くべきじゃないって、オダマキ博士も言つてたもんなあ

……」

「……ハロ？（クイッククイツ）」

「ん？ どーしたハスブレロ」

「ハロハロ？」

「んー？ ……事情を話せつて言つてたりする？」

「ハロ」

「俺達、本当は今日の明るいうちにトウカシティに行くつもりだつたんだよ。ただ、今どのへんにいるのかわからないから、いつそここで野宿しようかなーと」

「コノハハハ！ コノコノ！ コーノ！」

「え、なに？」

「ハロハロ。ハロ、ハロ？」

「コノハツ」

「ハーロツ！」

「チャモチャモ？ チャモチャ一、チャモー」

「コノー♪ コノハー！（ピヨンピヨン）」

「ハロハロー♪（パチパチ）」

「チャモツ！ チャモチャモチャモ♪ チャーモ、チャモチャモ♪」
三匹で何かを話しているみたいだが、内容はさっぱりわからない。

「なあ、チャモモ？ 一体何の話だ？」

「チャー！ チャモチャモ、チャモモー！」

「ハロー♪」

「コノ♪（フフン）」

「ふむ……何言つてんだお前ら？」

「「…………（ゲシゲシポカポカ）」」

「いてつ！ 蹤るな殴るな！ しかたねーだろわかんないんだから
！」

それでもジエスチャーや絵を描いてもらつたおかげで、なんとか三匹の意図を知ることができた。どうやらコノハナは、ここからトウカシティまでの近道を知っているらしい。今から出発すれば明るいうちに辿り着けるので、案内してやる、とのことだ。

「本当か!? それはありがたい。よろしく頼むよ！」

「コノハー！」

「あつ、ちょっと待てよ!?」

「チャモチャモー！」

コノハナが手招きをして、すぐに森の中へと入つていつてしまふ。コウイチが慌ててバツクバツクを背負い直して周りを見ると、ハスブレロだけでなくハスボーやタネボー達もコウイチ達を見送つてくれていた。

「ハロハロ～ツ♪」

「「ハボ～♪」」

「「ネーツ」」

「……じゃあな、みんな！　またいつか会おうぜ！」

「チャモ～！」

そう言つて、コウイチ達はコノハナを追いかけていく。時間にしてみれば僅かな間の出会いだつたが、それでも楽しく、熱くなるひと時だつた。新しい思い出をまた一つ手に入れ、コウイチ達は再びトウカシティを目指す。